

内なる証人の思想的系譜

—ウパニシャッドからマヌ法典、シャクンタラー物語へ—¹

手嶋英貴

本稿の目的

「神あるいは超自然的な存在が常に人の行いをしている」という観念は世界中に見られる。それは「たとえ他人が見ていなくても、悪事を働いてはならない」という戒めでもある。多くのキリスト教徒は、「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます」(『新改訳聖書』詩篇 139.1-2) という聖句を心に留めているだろう。日本を含む東アジア諸国では、「天網恢恢疎にして漏らさず」(『老子道德経』73) という警告がよく知られている。これらの例は、神などの神聖な存在が「外側から」私たちの行いをしているというイメージに立脚する点で共通している。

ところがインド古典の中には、こうした善悪の監視者について、興味深い観念がしばしば現れる。それは「善悪の行為は全て、行為者自らの内にいる真の自己たる証人(*sākṣin*-)が見ており、死後の行方に影響を及ぼす」というものである。本論考では、ウパニシャッドから『マヌ法典』、そして『マハーバーラタ』第1巻に含まれる有名な「シャクンタラー物語」の一場面にいたるまで、この「内なる証人」という観念の発展史をたどる。それにより、ヒンドゥー教徒に固有の倫理観がどう生じたか、とくにその

¹ 本稿は、京都大学人文科学研究所研究班「インドにおける『循環的存在論』の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に」の成果公開イベントとして2024年3月28日に開催されたシンポジウム「インド思想史におけるヒンドゥー法典の意義」(於・京都大学)での研究報告を元としている。本稿のうち第1章、および第3—4章の概要は、一般向けのハンドブックである *The Bloomsbury Handbook of Hindu Ethics* (Bloomsbury Academic, 2026 年) の一章 (1-3 The Ethical Function of the “Inner Witness”) として寄稿された。本稿は、上記の英文ハンドブックで割愛された専門性の高い情報・論述を含む学術論文として公にされるものである。

過程で代表的なヒンドゥー法典の一つ『マヌ法典』がいかなる役割を果たしたかを浮き彫りにしたい。

1. シャクンタラーが語る「内なる証人」

古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』(Mahābhārata [MBh] 全18巻、前3世紀～後3世紀頃の編纂)は、「バーラタ」と呼ばれる一族に起きた親族間戦争を、その主な内容としている。バーラタという呼称は、太古の王バラタ(Bharata)の名に由来する。第1巻「最初の巻」(Ādi-Parvan)では、一族共通の祖先であるバラタ王誕生の経緯が、彼の母であるシャクンタラー(Śakuntalā)を中心とするエピソードとして語られている。後代の大詩人カーリダーサ(Kālidāsa, 後4世紀～5世紀)の有名な戯曲『シャクンタラー』(Śakuntalā あるいは *Abhijñāna-Śakuntalam*)は、このエピソードに基づく翻案作品である。以下に、『マハーバーラタ』シャクンタラー物語(MBh 1.62–69)の内容を略述しておく。

昔メーナカーというアプサラス(天女)が、王族出身の聖仙ヴィシュヴァーミトラと交わって女兒を産み落とした。メーナカーは生まれたばかりの子を川岸に遺棄したが、カンヴァという聖仙がそれを発見し、シャクンタラーと名づけて育てた。彼女はカンヴァにより森の中で育てられ、美しい娘になった。いっぽうその頃、プール族にドゥフシャンタという強力な王がいた。彼はある日、森の中にある聖仙の庵でシャクンタラーと出会い、すぐ恋に落ちた。たまたまカンヴァは留守で、二人はあれこれと話をする。

その会話の中でドゥフシャンタは、彼女がカンヴァの実の娘ではなく、王族の血を引く女性であると知った。法典によれば、王族にのみ認められる「ガーンダルヴァ婚」²というものがあり、当事者の男女が情愛に基づき合意すれば、親の同意や結婚儀礼なしに、すぐ結婚することができる。彼は、この方法で即座に自分と結婚してほしいと

² ガーンダルヴァ婚は次の諸法典に記述されている：MānDhŚ 3.23, 26, and 32; ĀpDhS 2.11.20; GauDhS 4.10; BaudhDhS 1.20.7; VasDhS 1.33, ViDhS 24.23; YājDhŚ 1.61. Cf. Kane (1968–1977 II–1: 522–523).

彼女に迫った。するとシャクンタラーは、自分と彼との間に生まれる息子を、王位の継承者である皇太子にすることを条件として、その求婚に応じた。

ドゥフシャンタは「じきにあなたを王宮に迎え入れる」と彼女に言い置いて庵を去った。まもなくシャクンタラーは一人の男児を出産するが、夫が迎えに来ることはなかった。**やがて男児が6歳になった時、彼女はその子を連れてドゥフシャンタのいる王宮を訪ね、6年前に交わした約束を履行するよう請い願う。**するとドゥフシャンタは、本当は彼女のことを覚えていたにもかかわらず、「自分はお前を知らないし、関係をもった覚えもない」と言う。シャクンタラーは驚き悲しんで、彼の不誠実さを非難する。そして不毛な言い合いの末、彼女が失意のうちに王宮を去ろうとする時、中空から「シャクンタラーは真実を語った。ドゥフシャンタは自らの子を『バラタ』と名づけて養育せよ」という神々の声が響いた。

これを聞いたドゥフシャンタは、その場にいた臣下たちにこう告げた。「神々の言うとおりに、この子はわが子だ。私はそれを知っていたが、あえてそう言わなかった。彼女の言葉だけで私が男児をわが子と認めれば、人々に疑惑が生じるからだ」。こうして神々により、王の正統な息子であると証されたバラタは、やがて諸王の上に君臨する帝王となり、「転輪王」の称号をもつに至った。「バーラタ」という偉大な家系は、このバラタ王を始祖としている。

さて上述の物語のうち、本論考のテーマである「内なる証人」の観念は、王宮を訪ねてきたシャクンタラーに「知らない」と言い放ったドゥフシャンタに向かい、彼女が恥辱と怒りに唇を震わせながら語る場面（上の要約文のうち**太字部分**）に現れる。以下に該当箇所の内容と試訳を挙げる。

[1] MBh 1.68.25, 27–32, 35

25. atra te hr̥dayaṃ veda satyasyaivānṛtasya ca |

kalyāṇa bata sākṣī tvaṃ mātmanam avamanyathāḥ ||

これ（私との約束）について、貴方の心（hr̥daya-）は知っています。
ああ、高貴な方よ、アートマン（ātman-）は真実と不実の証人（sākṣin-）

です。アートマンを軽視してはいけません。

27. eko 'ham asmīti ca manyase tvam na hṛcchayaṃ vetsi munim purāṇam |
yo veditā karmaṇaḥ pāpakasya tasyāntike tvam vṛjinaṃ karoṣi ||
「私は一人だ」と貴方は考えています。[しかし]心臓に住む(*hṛcchaya-*)、
罪なる行為の認知者である古の苦行者 (*muni-purāṇa-*) を、貴方は知
りません。彼のすぐそばで、貴方は非道なことをしているのです。
28. manyate pāpakam kṛtvā na kaś cid veti mām iti |
vidanti cainaṃ devāś ca svaś caivāntarapūruṣaḥ ||
悪行をしていながら、「私 [の所業] を誰も知りはしない」と人は考え
ます。[しかし] その者 [の所業] を神々が、そして自分の内部にいる
プルシャ (*antarapūruṣa-*) が知っています。
29. ādityacandrāv anilānalau ca dyaaur bhūmir āpo hṛdayaṃ yamaś ca |
ahaś ca rātriś ca ubhe ca saṃdhye dharmaś ca jñāti narasya vṛttam ||
太陽と月、風と火、天、地、水たち、心 (*hṛdaya-*)、ヤマ (閻魔)、さ
らに昼、夜、二つの [昼夜の] 結び目 (黎明と黄昏)、そしてダルマが、
人間の行いを知るのです。
30. yamo vaivasvatas tasya niryātayati duṣkṛtam |
hṛdi sthitaḥ karmasākṣī kṣetrajño yasya tuṣyati ||
心臓 (*hṛd-*) にいる行為の証人 (*karmasākṣin-*) たるクシェートラジュ
ニヤ (*kṣetrajña-*「田地を認知する者」) が当の者に満足すれば、ヴィヴ
アスヴァントの息子ヤマは、その者の悪業を持ち去ってくれます。
31. na tu tuṣyati yasyaiṣa puruṣasya durātmanaḥ |
taṃ yamaḥ pāpakarmāṇaṃ niryātayati duṣkṛtam ||
しかし邪悪な人間に対し、それ (クシェートラジュニヤ) が満足しな
いなら、罪をなしたその者を、ヤマは悪業とともに持ち去ります。
32. avamanyātmanātmānam anyathā pratipadyate |
devā na tasya śreyāṃso yasyātmāpi na kāraṇam ||
自ら (*ātmanā*) アートマンを (*ātmānam*) 軽視し、[真実とは] 別のあ
り方をとれば、そのような人に対して神々は好意的でなく、アートマ
ンもまた有為なものになりません。
35. yadi me yācamānāyā vacanaṃ na kariṣyasi |
duḥṣanta śatadhā mūrdhā tatas te 'dya phaliṣyati ||

もし請い願う私の言葉〔どおりのこと〕をなさらなければ、そのせいで、ドゥフシャンタよ、今日あなたの頭は百〔のかけら〕に砕け散るでしょう。

ここでシャクンタラーは、ドゥフシャンタの過ちを非難し、その報いが災いとして彼に降りかかることを警告している。そして、その過ちが決して見過ごされない理由として、人の心臓(*hrd-*)にはアートマンが存在し、それがあらゆる行いを当人の内部より見ているからだ、と述べている。

たびたび登場する *ātman-* という語は、一般的な意味での「自己／自分」をも表しうる。しかし引用文中では、1.68.32 の具格名詞 *ātmanā* 「自ら」以外は一般的な自己ではなく、ウパニシャッド以来、インド思想の主要な論点の一つであった自己の本体「アートマン」の類だと考えてよいだろう。このことは、シャクンタラーがくだんの *ātman-* を、「内部にいるプルシャ（人間）」(*antarapūruṣa-*)、「クシェートラジュニヤ」(*kṣetrajña-* 「田地を認知する者」³) 等と言い換えていることに窺われる。これらの名称は、やはりウパニシャッド以来、しばしばアートマンの類語（ときに同義語）として用いられているからである。さらに言えば、アートマンないしプルシャが「心臓にいる」というイメージも、同様に古くから語られてき

³ *kṣetra-* はもともと「耕地」を指す語だが、*kṣetrajña-* という哲学的用語においては「身体」あるいは物質的な「現象世界」を表す。その身体ないし現象世界 (*kṣetra-*) を認知する者 (*-jña-*) が「クシェートラジュニヤ」であり、実際には身体や物質的世界に対する魂や精神的原理を意味している。ただし、それがアートマンと同じかどうかは文献によって異なる。例えば『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』(ŚvetU 6.16) は、至高の精神原理であるアートマンより下位にクシェートラジュニヤを位置づけ、それが物質的世界の本源 (*pradāna-*) と対をなすと述べている。「バガヴァッド・ギーター」(MBh 6.35 = *Bhagavadgītā* 13) では、クシェートラジュニヤが高次のプルシャ (*para-puruṣa-*) および至高のアートマン (*paramātmā-*) と等置され、物質的世界の本源 (*prakṛti-*) に相対するものとして教示される（後出「注5」参照）。また、『マハーバーラタ』のうち多くの哲学的教説を集めた第12巻では、クシェートラジュニヤが世界の本源でもある最高神ヴァースデーヴァと同一視される (MBh 12.326.38–39 [Nārāyaṇīya section])。諸文献におけるクシェートラジュニヤの用例について、Johnston 1937: 46–55 参照。『マヌ法典』でのクシェートラジュニヤについて、後出「注19」参照。

たものである（後出文例〔2〕および注を参照のこと）⁴。

一方で、そのアートマンが人の内部にだけでなく、その人の行いを監視する「証人」(*sākṣin-*)となり、行いの善悪に応じて死後の行方に影響を及ぼす、というシャクンタラーの言説は独特のものである。ウパニシヤッドやその思想を一基盤としながら発展したヴェーダーンタ哲学では、アートマンやプルシャとよばれる自己の本体は、基本的に、あらゆる行為から隔絶した無為の存在として教示されるからである。また、古典サーンキヤ哲学では、物質原理のプラクリティが、精神的原理であるプルシャによって見られることで、サットヴァ（純質）、ラジヤス（激質）、タマス（暗質）という三グナ（要素）からなる現象世界を開展させる、という説明がなされる。その限りで、プルシャは「証人（目撃者）」(*sākṣin-*)あるいは「見る者」(*draṣṭṛ-*)であると言われるが、同時にプルシャは「非行為者」(*akartṛ-*)であると述べられており、限りなく無為に近い存在とされている⁵。

⁴ このほか MBh 1.68.27 に「古の苦行者」(*muni-purāṇa-*)という表現もあるが、これに類似した「古のプルシャ」(*purāṇa-puruṣa-*)という表現が『サーンキヤ・カーリカー』(*Sāṃkhya-Kārikā*〔SK〕、4～5世紀頃か)の諸注釈書に見られる。例えば *Mātharavṛtti* はサーンキヤ学派の創始者であるカピラを「聖なる古のプルシャの化身」(*ad SK 1: bhagavataḥ purāṇapuruṣasyāvatāras*)と呼んでいる。また *Jayamaṅgalā* は、個々の生命体に内在するプルシャよりも高次の存在として「唯一なる古のプルシャ」(*ad SK 17: eka eva purāṇaḥ puruṣas*)を挙げている（これらの用例に関して村上 1978: 593–595 参照）。シャクンタラーの言葉にある「古の苦行者」という表現が、サーンキヤ思想やその学派と関係をもつかどうかは不明であるが、おそらくは古代インドに流布していたプルシャに関する一イメージを反映したものと想像される。

⁵ SK 19. *tasmāc ca viparyāsāt siddham sākṣitvam asya puruṣasya | kaivalyam mādhyasthyam draṣṭṛtvam akartṛbhāvaś ca* || 「またそれ（現象の要因である三グナ）と反対であるから、このプルシャについて、証人（目撃者）であること、独存であること、中立であること、見る者であること、そして非行為者の状態にあることが成り立つ」。古典サーンキヤにおけるプルシャの特徴については Larson 1979: 167–171、諸注釈を参照した詳しい分析として村上 1978: 147–256（上に挙げた SK 19 に関してはとくに 210–238）参照。なお、これに類似したプルシャの説明は「バガヴァッド・ギーター」にも見られる。Cf. vv. 22&29 in MBh 6.35 (*Bhagavadgītā* 13): 22. *upadraṣṭānumantā ca bhartā bhoktā maheśvaraḥ | paramātmēti cāpy ukto dehe 'smin puruṣaḥ paraḥ* || 「[プラクリティから生じる現象世界を] 近くで見る者、承認する者、保持する者、享受する者、大自在神、また至高のアートマンとも言われる高次のプル

ではシャクンタラーの言葉に現れる、こうしたアートマン（プルシャ）の観念は、何に基づいているのだろうか。次章以降、ウパニシャッドや『マヌ法典』に見られる関連記述を取りあげながら、その観念の発展プロセスを検討したい。

2. ウパニシャッドに見られる「内なる証人」の思想的萌芽

シャクンタラーが語るアートマンないしプルシャには、大まかに言えば、次の三つの観念の複合が見られる。

1. 自己の本体であるアートマン（プルシャ）は人の内部、とくに心臓にいる。
2. アートマン（プルシャ）は、人の行為を常に見ている。
3. アートマン（プルシャ）は、人の行いの善悪に応じて、その死後の行方に影響を及ぼす。

このうち第一に挙げた「アートマン（プルシャ）は人の内部、とくに心臓にいる」という観念は、初期ウパニシャッド以来、多くの個所に現れている⁶。例えば、初期ウパニシャッドの一つである『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』（*Chāndogya-Upaniṣad* [ChU]、サーマヴェーダ所属）第3章では、どんな穀粒よりも微細なアートマンが心臓の内部に(*antarhṛdaye*)いると述べられる⁷。

シャが、この身体のうちにいる。」 29. *prakṛtyaiva ca karmāṇi kriyamāṇāni sarvaśaḥ | yaḥ paśyati tathātmānam akartāraṁ sa paśyati* || 「また諸行為は全てプラクリティのみによって行われている。ありのままにアートマンを非行為者として見る者、彼は[真に]見る。」

⁶ アートマンあるいはプルシャが「心臓の内部にいる」という説明の例として、PraśU 3.6; BĀU-K 4.4.22; MuṇḍU 2.2.7–8 (以上 *ātman*-の例). BĀU-K 2.1.17, 4.3.7, 5.6.1 (=ŚB-M 14.5.1.17, 14.6.1.1.3, 14.7.1.7, 14.8.8.1); TU 1.6.1.; MuṇḍU 2.1.10; KaṭhU 6.17; ŚvetU 3.13–14; MaitU 6.1–2 (Buitenen 1962: 106) (以上 *puruṣa*-の例) がある。

⁷ 平行文が ŚB-M 10.6.3.2 (学匠シャーンディリヤ [Śāṇḍilya] の教説) に見られる。ただしそこでは、本文に引いた文例 [2] のうち「上述の [特徴をもつ] 我がアートマンは、心臓の内部にあり (*eṣa ma ātmā antarhṛdaye*)」(ChU 3.14.3) という句が、「この金よりなるプルシャが胴体 (*ātmān-*) の内部にあり」(*ayām antārātman puruṣao*

[2] ChU 3.14.2-3

2. manomayaḥ prāṇasarīro bhārūpaḥ satyasamkalpa ākāśātmā sarvakarmā sarvakāmaḥ sarvagandhaḥ sarvarasaḥ sarvam idam abhyātto 'vāky anādarah. 3. eṣa ma ātmā antarhṛdaye 'ñyān vrīher vā yavād vā sarṣapād vā śyāmākād vā śyāmākataṇḍulād vā.

2. 意からなり、氣息を身体とし、輝きを容貌とし、真実を意図とし、虚空を本質 (*ātman-*) とし、全ての行為を有し、全ての欲求をもち、全ての香をもち、全ての味をもち、この全世界に相対して[それを]受け取る者であり、語らず、顧慮しない者。3. 上述の[特徴をもつ]我がアートマンは、心臓の内部にあり、米よりも、大麦よりも、辛子よりも、黍よりも、黍の[中核の]粒よりも微細である。

第二の「アートマン（プルシャ）は行為を常に見ている」という観念については、それとまったく同じものをウパニシャッドに見出すことはできないようである。ただし、アートマン（プルシャ）に「監督者」や「証人（目撃者）」という性格を与える例は、中期ウパニシャッドの一つ『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』(*Śvetāśvatara-Upaniṣad*〔ŚvetU〕、白ヤジュールヴェーダ所属)に見られる。

[3] ŚvetU 6.11

eko devaḥ sarvabhūteṣu gūḍhaḥ sarvavyāpī sarvabhūtāntarātmā |
karmādhyakṣaḥ sarvabhūtādhivāsaḥ sākṣī cetā kevalo nirguṇaś ca ||

hiraṇmāyas) となっている。ŚB-M 第 10 巻はヴェーダ大祭の一つアグニチャヤナ (*agnicayana-*) を扱っている。その文脈上、ŚB-M 10.6.3.2 に含まれる *ātmán-* という語は、人の「身体」と、アグニチャヤナで築かれる鳥形レンガ祭壇の「胴体部」とを、両義的に表していると考えられる。また *puruṣa-* という語も、人における「自己の本体」と、レンガ祭壇の胴体部に安置される金製の「人」(人形) とを、両義的に表しているであろう。金よりなるプルシャが心臓内にいるという説明は TU 1.6.1 にも見られる。なお、KāthU 4.12-13 では「親指大のプルシャ」が胴体 (*ātman-*) の中心にいるとされる (*aṅguṣṭhamātraḥ puruṣo madhya ātmani tiṣṭhati*)。また他方では「親指大のプルシャ」は心臓に宿るとも言われている (KāthU 6.17; ŚvetU 3.13)。「親指大のプルシャ」に関する詳しい分析として、村上 1978: 134-144 参照。

全存在のうちに隠された一つの神、全存在の内部にあるアートマンは、行為の監督者 (*karmādhyakṣa-*)、全存在に住する者、証人 (*sākṣin-*)、罰する者⁸、独存者、性質を持たない者として、全てに行きわたっている。

ここではアートマンが様々な言葉に言い換えられている。そのうち「行為の監督者」(*karmādhyakṣa-*) および「証人」(*sākṣin-*) という語は、シャクンタラーが使う「行為の証人」(*karmasākṣin-*, MBh 1.68.30) や「証人」(*sākṣin-*, MBh 1.68.25) といった用語と共通している。またそれは「全存在に住する」(*sarvabhūtādhivāsa-*) と言われているから、人の内部にいるとも考えられているのだろう。ただし、ウパニシャッド本文にこれ以上の情報はなく、内なるアートマンが、単に対象を見るだけの者か、あるいはより能動的に人の行いの善悪を見定める者であるかは判断できない⁹。

⁸ *cetr-* という語を、主な訳者たちは第 1 類動詞√*ci-* *cayate* 「罰する、復讐する」の派生語 (cf. RV 7.60.5) と解釈している (例えば Rau 1964: 42 ‘Rächer’; Oberlies 1998: 117 ‘der Richter’; Olivelle 1998: 431 ‘the avenger’)。ただしこの *cetr-* を、第 3 類動詞√*ci-* *ciketi* 「観察する、認識する」の派生語として解釈し、「観察する者／認知する者」と訳しても、文脈上大きな齟齬は生じない。

⁹ 本文に引いた ŚvetU 6.11 に対するシャンカラ (Śaṅkara、8 世紀頃) の註解によれば、*karmādhyakṣa-* とは「全生物によってなされる多様な行為の監督者」(*sarvaprāṇakṛtavicitrakarmādhiṣṭhāṭṛ-*) であり、*sākṣin-* は「全ての存在の証人」(*sarveṣāṃ bhūtānāṃ sākṣi*)、「全てを見る者」(*sarvadraṣṭṛ-*) であるという。なお、*sākṣin-* という語に関してシャンカラは、『ブラフマスートラ』(*Brahma-Sūtra* [BS]) 註解のうち、第 1 詩節より前に置かれた序説で次のように述べている (この序説の内容を解説したものとして、村上 1991: 80–82 参照) : *evam ahaṃpratyayinam aśeṣasvapracārasākṣini pratyagātmany adhyasya taṃ ca sarvasākṣiṇaṃ tadviparyayeṇāntaḥkaraṇādiṣv adhyasyati* 「このように、[人は誤って] 私という観念をもつもの (内的思考器官) を、余りなく (全ての) 自らの行いを目撃する者 (証人) である内部のアートマンに付託し、さらにこうした、全てを目撃する者 (証人) を、それと逆に、内的思考器官等に付託する」。いっぽう「見る者」(*draṣṭṛ-*) という語は、古典サーンキヤ (cf. 前出「注 5」) のみならず、サーンキヤと密接な関係をもつヨーガ学派でも、プルシャの異称として挙げられる。例えば『ヨーガスートラ』(*Yogasūtra* [YS]、5 世紀前後か) では、この「見る者」のはたらきを受動的なものとして、以下のように説明する。YS 2.20: *draṣṭā dṛśimātraḥ śuddho ’pi pratyayānupaśyas* 「見る者とは、見ることのみをなす者であり、清浄であっても、対象に沿って (対象の動きの

一方で、このウパニシャッドに見られる *karmādhyaṣa-* と *sākṣin-* がともに名詞 *akṣa-*（眼）を基にして作られた語であることは注目に値する。そこから、アートマン（プルシャ）の観念が古くから「眼」のイメージと結びついてきたことが窺われるからである。このことは、次に述べる論点とあわせて考える場合、一つの示唆を与えているように思われる。

さて、第三の「アートマン（プルシャ）は、人の行いの善悪に応じて、その死後の行方に影響を及ぼす」という観念について言えば、それを直接に言明する例は、ウパニシャッドに見られないようである。ただし、この観念を構成する主たる要素、つまり「たえず人の善悪を見、死後の行方に影響を及ぼす者がいる」という思考は、数としてはわずかであるが、見出すことができる。

その一例として、最初期のウパニシャッドと考えられる『ジャイミニヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』（*Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* [JUB]、サーマヴェーダ所属）のパッセージを挙げておく。それによれば、人は死んだ後、地上を離れ、天界の入口である太陽にやって来る。そして、そこにいる「恐ろしい神格」（文脈から太陽のこと）が、生前の行いに応じて、死者を天界へ通すかどうか決めることになっている。

[4] JUB 1.1.5 (= ed. Oertel 1.5)

1. *sā haiṣākhalā devatāpasedhantī tiṣṭhati | idaṃ vai tvam atra pāpam akar
nehaiṣyasi | yo vai puṇyakṛt syāt | sa iheyād iti* | 2. *sa brūyāt | apaśyo vai tvan
tat | yad ahan tad akaravam | tad vai mā tvan nākārayiṣyaḥ | tvam vai tasya
kartāsi--iti* | 3. *sa ha veda satyam māheti | satyaṃ haiṣā devatā | sa (sā?) ha
tasya neśe yad enam apasedhet | tam upaiva hvayate* |

1. そのようなこの恐ろしい (*akhala-*) 神格（太陽）¹⁰が「のぼってき

とおりに）見る者である」。

¹⁰ Fujii 2026 によると、「恐ろしい」「どう猛な」などを意味する形容詞 *aghalā-/akhala-* は、文脈によってその修飾対象がおおむね以下の四つに分かれる。「ルドラ神」ŚB-M 12.7.3.20 = ŚB-K 14.4.3.18 (*aghalā-*); KB 2.2 [4,22–24] (*aghalā-*); JB 2.254, 3.262 (*akhala-*); 「太陽」JB 2.66 (*akhala-*); 「死の使者たち」AV-Ś 8.8.10 = AV-P 16.29.10 (*aghalā-*); 「猛獣」JB 2.266 (*aghalā-*)。Fujii は、本文に引用した JUB 1.1.5（文献例 [4]）に現れる *akhala-* を、その文脈から「太陽」を意味する例に含めている。

た者を] 追い払いながら立っている。「お前は[地上の] この場所での悪行を行ったのだ。お前はここを通ってはならない。善行を行う者であったなら、その者はここを通ることができるだろう」と[言いながら]。2. 彼は言うべきである、「お前は私が行っていたことを見ていた。お前は私にそれをさせなかっただろう（させないこともありえただろう）¹¹。お前がその行為者なのだ」と。3. [その神格は言う] 「彼は知っている。私に真実を述べている」と。この神格は真実である。その[神格]は[真実を述べている] 彼を追い払うようなことはできない。彼をまさに呼び寄せる。(テキスト・訳 藤井 2020: 75)

とりわけ引用文の前半では、太陽が地上にいる人の行いを全て見ており、その善悪に応じて死後の行方（天界に行くかどうか）を差配するということが述べられている。日本でも昔から、悪い行いを戒めるため、人々は「お天道が見ていらっしゃる」などと言われてきたが、それと同じように、太陽が地上の人々を監視しているという考えがあったわけである。

その上で注目すべきは、古代インドにおいて、太陽が「自己（の本体）と一体である」という独特の思考が存在したことである。例えば『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』の一節はこう述べている。

[5] ChU 3.13.7

atha yad **ataḥ paro divo jyotir dīpyate** viśvataḥprṣṭheṣu sarvataḥprṣṭheṣv anuttameṣūttameṣu lokeṣv, idaṁ vāva tad yad **idaṁ asminn antaḥ puruṣe jyotis**.

次に、あそこに、遠くで燃えている光、一切の方へ向いた背（軌道）の上で、全ての方へ向いた背の上で、無上かつ最高の諸世界の上にあるもの、これはちょうどこの人間の内部にある光である。

「あそこに、遠くで燃えている光」が太陽を指すことは明らかであり、また「この人間の内部にある光」についても、実質的にアートマンを指すと考えてよいだろう。前出文例 [2] (ChU 3.14.2) では、心臓の内部にあ

¹¹ *akāraṇīyas*: 第2類動詞 $\sqrt{kr}$ 、未来語幹、a-アオリスト二人称単数、使役動詞（能動態）。

るアートマン (*ātmā antaḥrīdaye*) が「輝きを容貌とする」(*bhārūpa-*) と表現されている。白ヤジュルヴェーダ所属『シャタパタ・ブラーフマナ』(*Śatapatha-Brāhmaṇa Mādhyandina*〔ŚB-M〕)のウパニシャッド相当部(第14巻)でも、有名なジャナカ王とヤージュニヴァルキヤの問答の中で、同様の特徴がアートマンについて述べられている¹²。また、後期ウパニシャッドの一つ『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』(*Maitrāyaṇīya-Upaniṣad*〔MaitU〕)には、太陽を「外部のアートマン」、氣息を「内部のアートマン」とする教説が見られる¹³。

これらの例から知られるとおり、古代インドではアートマン(プルシャ)が、しばしば太陽と一体視されていた。そのことを視野に入れると、「たえず人の善悪を見、死後の行方に影響を及ぼす者」という観念が、太陽を介して、アートマン(プルシャ)に結びついたという可能性も考えられるだろう。

ちなみに、太陽とアートマンの共通性として、上に挙げた「光／輝き」のほか、「眼」という表象も挙げられる。先に述べたとおり、『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』(文例〔3〕)ではアートマン(プルシャ)の観念が「眼」(*akṣa-*)のイメージと結びついていたが、これと同じことが太陽に関しても見られる。インド最古の聖典『リグヴェーダ』(*R̥gveda-Saṁhitā*〔RV〕、主要部は前1200年頃成立)以来、太陽はしばしば天空の「眼」として捉えられてきた。例えば以下の詩節では、太陽

¹² ŚB-M 14.7.1.2 (BĀU-K 4.3.2) でジャナカ王から「このプルシャは、どんな光を有するか」(*kīṁjyotir ayám pūruṣas*) と問われたヤージュニヴァルキヤは「太陽を光として有する」(*ādityājyotis*) と答える。それ以降、太陽が沈んだ後は月 (*candrāmas-*)、月が沈んだ後は火 (*agnī-*)、火が消えた後は語 (*vāc-*) を光とする、と順に回答する。そして語が消えた後を問われ、「アートマンを光として有する」(*ātmājyotis*) と最後の答えを述べている。

¹³ MaitU 6.1 (Buitenen 1962: 106 [tr.: 134]): *dvidhā vā eṣa ātmānaṁ bibharti | ayaṁ yaḥ prāṇo yaś cāsā ādityaḥ | ... asau vā ādityo bahirātmāntarātmā prāṇaḥ | ... atha ya eṣo 'ntarāditye hiraṇmayāḥ puruṣo yaḥ paśyatīmāḥ hiraṇyāvasthāt, sa eṣo 'ntare hṛtpuṣkara evāśrito 'nnam atti* || 「この者は、アートマンを二様に分けて保持するのだ。氣息とは、またあの太陽とは、これ(アートマン)である。……あの太陽は外部のアートマンであり、氣息は内部のアートマンである。……そしてこの、太陽に存在する金からなるプルシャ、[つまり]金の居所からこれ(大地)を見ている者は、[人の]内部に、ほかならぬ心臓の蓮華に安住し、食物を食べる」。

(*sūrya*-) が神々の眼であり、かつ全ての生類の本体 (*ātmán*-) であると言われている¹⁴。

[6] RV 1.115.1

citrām devānām úd agād ānīkaṃ cākṣur mitrāsya váruṇasya agnēḥ |
 āprā dyāvāprthivī antárikṣam sūrya ātmā jágatas tasthúśaś ca ||

輝く、神々の顔は昇った。ミトラの、ヴァルナの、アグニの視覚器官(眼)として。天地、中空を彼は満たした (*āprās*¹⁵)。太陽は行くもの(人・動物)と停止しているもの(植物)との本体 (*ātmán*-) である。

こうした諸例を視野に入れて考えれば、本章の冒頭で挙げた三つのうち第三の「人の行いの善悪に応じて、その人の死後の行方に影響を及ぼす」という観念の萌芽は、太陽を行為主体とする形で、すでにウパニシャッド中に生じていたと想像される。シャクンタラーのアートマン(プルシャ)観も、おそらくはこれに遠い起源をもっているであろう。

ただし、シャクンタラーが語るアートマン(プルシャ)は、天空にある太陽と異なり、「人の内部(とくに心臓)からその行いを見る」存在である。したがって、シャクンタラー流の「内なる証人」としてのアートマン(プルシャ)の観念が生まれるためには、ウパニシャッド期にあった二つの思考、つまり「人の行いを見、その善悪に応じて当人の死後の行方に影響を及ぼす者(太陽)がいる」(文例 [4] [JUB 1.1.5])、および「内部(と

¹⁴ さらに次の詩節では、太陽が、地上の生類たちを見る存在として謳われている。RV 1.50.7: ví dyām eṣi rájas prthú áhā mīmāno aktúbhiḥ | páśyañ jánmāni sūriya || 「天を、広大な空を汝は行く、夜の終わりたち(暁)によって昼を測りながら、生類たちを見ながら、太陽よ」。太陽と眼の結びつきに関する他の例について、Macdonell 1898: 23 参照。

¹⁵ *āprās* < *ā* + *aprās* : 第2類動詞√*prā*-「満たす」、s-アオリスト能動態、三人称単数 (*aprās*-s < *aprās*-t, cf. Narten 1964: 18)。ただし Hoffmann 1967: 215 は、RV 1.52.13c にある *āprās* を指令法(injunctive)にとつて *ā prās* と読み、*antárikṣam* を目的語とする文に対し“... du (Indra) füllst den Luftraum ...”という訳をあてている。その注記は次のとおり：“*āprāḥ* ist wohl gegen den Padapāṭha als Inj. *ā prāḥ* zu lesen, der aber auch generell verstanden werden könnte: ‘du erfüllst immer wieder’. ...”。この注記で示された Hoffmann の解釈に従えば、文例 [6] の *āprā dyāvāprthivī antárikṣa* という文は「天地、中空を彼は繰り返し満たす」と訳せるだろう。

くに心臓）に見る者（アートマン＝プルシャ）がいる」（前出文例〔2〕〔ChU 3.14.3〕、〔3〕 ŚvetU 6.11）と、という二つを明確に統合する段階が必要となる。次の章以降では、その段階の思想を示す例として、『マヌ法典』の一部に見られるアートマン（プルシャ）の教説を見ることにしたい。

3. 『マヌ法典』第12章が説く「自己の本体」とその再生

紀元前200年頃から後200年頃にかけて編纂された『マヌ法典』(*Mānava-Dharma-Śāstra* [MānDhŚ]) は、ヴェーダ聖典の補助文献 (*smṛti*-) の一つでありながら、中世以降のヒンドゥー教徒にとっても、生き方の規範を教示する重要な聖典とみなされてきた¹⁶。したがって『マヌ法典』は、ヴェーダの伝統とヒンドゥー教の双方をつなぐ結節点として位置づけることができる。わけても、その最後の章である第12章（以下「終章」と呼ぶ）には、ヴェーダの伝統とヒンドゥー教とを架橋する思想の要素が随所に見られる。初期ヒンドゥー教の生成過程を考えるうえで、重要な文献の一つであると言えよう。

その『マヌ法典』終章は126詩節からなる。章の梗概を示す冒頭部を除くと、前半部（12.3–82）では自己の構造と死後の再生に関する教説が、そして後半部（12.83–126）では良き再生を得るための、さらには輪廻そのものから解脱するための教説が語られる。このうち前半部の教説をさらに詳しくみれば、おおむね次の四つのパート（A～D）に区分することができる。

- A. MānDhŚ 12.3–11： 身・語・意による行為によって生じる業と、その
善悪に応じた再生の諸相
- B. MānDhŚ 12.12–23： 自己の構造、および死後の行方と再生のプロセス
- C. MānDhŚ 12.24–51： 三種のグナ（純質 *sattva*、激質 *rajas*、暗質 *tamas*）
の状態に応じた再生の諸相
- D. MānDhŚ 12.52–82： 現世での罪に起因する悪しき再生の諸相

¹⁶『マヌ法典』中世期における『マヌ法典』の権威の高さは、ミーマンサー学派の学匠クマーリラ（Kumārila Bhaṭṭa、560–620 頃）がそれに強固な信頼を置いていたことからよく窺える（cf. 吉水 2015: 15–59）。

本論考に深く関わるのは、上記の「B」に含まれる「自己の構造」(MānDhŚ 12.12–15)、および「死後の行方と再生のプロセス」(MānDhŚ 12.16–23)を説く部分である¹⁷。この教説は、他の法典文献はもちろん、哲学分野の文献にも類例の見られない『マヌ法典』独自のものである。そこでは、まず個人存在における「自己の構造」が次のように説明される。

[7] MānDhŚ 12.12–15

12. yo 'śyātmanah kārāyitā taṁ kṣetrajñam pracakṣate |

yaḥ karoti tu karmāṇi sa bhūtātmocyate budhaiḥ ||

この¹⁸アートマンに属する¹⁹行為させる者 (kārāyitr-)、それをクシェ

¹⁷ 本文でBパートに分類した MānDhŚ 12.12–23 は、それに続くCパート(12.24–51)およびDパート(12.52–82)で展開される教説に対して、理論的な基礎を提供するものとなっている。『マヌ法典』終章前半部の内容を整理・解説したものとして、Rocher: 1983 を参照のこと。なお、終章前半部の内容は、その前に置かれた第11章の内容と関係しているように見える。第11章では、生活上何らかの過失や罪を犯した場合になすべき浄罪(prāyaścitta-)が、それに対応する特定の悪行とともに規定されている。それを受けて、終章前半部(12.3–82)では、悪い行いをする(またそれをしたまま浄罪を行わずにいる)と、それがどのような仕組みで死後の悪しき再生に結び付くかを説明していると捉えることが出来よう。そうすることで人々に、第11章の規定を遵守するよう促す意図があったと想像される。

¹⁸ 属格代名詞「この」(asya)は、Medhāthiti 注に従い、後続の属格名詞 ātmanas (アートマン〔自己の本体〕に属する)にかかる指示形容詞であると解釈した。いっぽう、直前の詩節(12.11)における主語 mānava- (人間)の指示代名詞として理解することも可能である(後者の解釈をとれば「この者(人間)の」という訳になる)。後に 12.23 で使われる表現 asya jīvasya の asya も同じく二とおりに解釈しうる。なお、属格名詞 ātmanas の別解釈については次注参照のこと。

¹⁹ 主語 kārāyitā との関係で、属格の ātmanas が持つ機能は二とおりに解釈できる。一つは、ātmanas の属格機能をオーソドックスな従属の意味とする解釈である。この場合、主語である「行為させる者」(kārāyitr-、つまりクシェートラジュニヤ)は、それより高次の自己であるアートマン (paramātmān-の類)に所属するものとして理解される(本文の訳ではこれを採用した)。もう一つの解釈は、動作主を表す tr-を接尾辞とする使役語幹名詞 kārāyitr- (行為させる者)の動作対象、つまり「行為させられる側＝行為する当事者」を表すという解釈である(cf. Pāṇini 2.3.65)。例えば、Medhāthiti 注は ātman-を身体(śarīra-)と換言しているが、彼は次詩節(12.13)で「身体をもつ者(dehin-)」と呼ばれている内部のアートマン(antarātmān-)、つまりジーヴァ(jīva-)が宿る対象としての身体を想定しているだろう。そう考える場合、この ātmanas の属

ートラジュニャ (*kṣetrajñā-*) と呼ぶ。いっぽう、諸々の行為をする者はブータートマン (*bhūtātman-*、存在物の本体²⁰) と、知者たち (*budha-*) によって言われる。

13. *jīvasaṃjño 'ntarātmānyaḥ saha jaḥ sarvadehinām |*

yena vedayate sarvaṃ sukhaṃ duḥkhaṃ ca janmasu ||

[そのブータートマンとは] 別の者として、ジーヴァ (*jīva-*) という呼称をもった、身体ある全ての者たちと共に生じる内部のアートマン (*antarātmān-*²¹) がある。これ (ジーヴァ／内部のアートマン) により、諸々の生において全ての楽と苦が感受される。

14. *tāv ubhau bhūtasamprktau mahān kṣetrajñā eva ca |*

uccāvaceṣu bhūteṣu sthitaṃ taṃ vyāpya tiṣṭhataḥ ||

存在物と結合したこの両者、[つまり] 他ならぬマハーン (「大いなる者」おそらくブータートマンを指す²²) とクシェートラジュニャは、上位・下位の諸存在に住する彼 (ジーヴァ) を満たし続けている。

格機能は主語の動作対象となり、「(「身体」ではなく)「身体に対し」と訳すべきものと想像される。つまり *yo 'śyātmanah kārayitā taṃ kṣetrajñāṃ pracakṣate* という文は「この身体 (*śarīra-*) に対し行為させる者 (*kārayitr-*)、それをクシェートラジュニャ (*kṣetrajñā-*) と呼ぶ」と訳すことになる。どちらの解釈を採るかで、クシェートラジュニャより高次の自己があるか否か、という点で自己の構造に違いが生じてくる (この論点に関連して、前出「注3」参照)。

²⁰ *bhūtātman-*の語は、先行する *MānDhŚ* 5.109 において、*manas-*(意)および *buddhi-*(覚)とともに列挙されている。この語の意味は文献によって異なっており、統一的な概念を見出すことは難しい (Johnston 1937: 46–50)。Edgerton 1965: 256 (n. 1) は、『マハーバーラタ』第12巻「解脱法品」(*Mokṣadharmā-Parvan*)に散見される *bhūtātman-* (*MBh* 12.231.11–12; 245.7.11; 286.18) が、概ね輪廻の主体である *jīva-*と同義に用いられていることを報告している (cf. 吉水 2010: 297, n. 2)。

²¹ *antarātmān-* (内部のアートマン) という語は、*MānDhŚ* 6.63 と 73 でも、再生・輪廻の主体として言及されている。現世の身体と結合した個体存在の自己「ジーヴァ」(*jīva-*)と等置されていることからみても、ここでの *antarātmān-*は、決して高次の自己ではないだろう。この点で、ウパニシャッドに見られる同じ語 (例えば *MaitU* 6.1 *antarātmān-*, cf. 前出「注13」) やシャクンタラー物語にある類語 (*MBh* 1.68.2 *antarapūruṣa-*)とは意味合いが異なる。

²² *MānDhŚ* 1.15 に *mahān ātmā* という語があり、ブラフマンによる世界創造の過程で *manas-*や *ahamkāra-*に次いで創出されている。ここでの *mahān ātmā* が、本文の *mahān* と関係があるかどうか不明である。

15. asaṃkhyā mūrtayas tasya niṣpatanti śarīrataḥ |

uccāvacāni bhūtāni satataṃ ceṣṭayanti yāḥ ||

彼（ジーヴァ）の身体から、無数の形態たち（mūrti-）がほとぼしり出る。それらが上位・下位の諸存在を常に活動させる。

このパッセージには、シャクンタラーの言葉にもあった「クシェートラジュニャ」（kṣetrajñā-）（MBh 1.68.30）というアートマン（プルシャ）の異称が現れている。これはアートマンの別名の一つであるが、自己の構成全体における位置づけは必ずしも明確ではない（cf. 前出「注 19」）。ただし上の文脈では、地・水・火・風・空という物質的要素から成る自己「ブータートマン」（bhūtātman-）に行為をさせる存在であるから、ブータートマンよりは高次のアートマンであると考えられる。この二種類のアートマンは、個体存在の身体と結びついた下位の自己（魂）である「ジーヴァ」（jīva-²³）の中に浸透している。そして、二つの高次のアートマンが浸透したジーヴァが、人生の喜びや苦しみを経験する主体、つまり一般に人が「私」として捉えている自己となる。このように『マヌ法典』の教説では、自己を「クシェートラジュニャ／ブータートマン／ジーヴァ」という三つのレベルからなるものとして捉えているのである。

さて、上の文例 [7] に続く 2 詩節（MānDhŚ 12.16–17）では、悪い行いをした者は死んだ後、ヤマ（閻魔）の責め苦を受けるため、生前とは別の身体をもつと説かれる。そして所定の責め苦を受けた後は、その身体も

²³ ヴェーダの古層聖典であるサンヒター（Saṃhitā）やブラーフマナ（Brāhmaṇa）の諸文献で、ジーヴァ（jīva-）は「生きている」「生氣ある」といった意味の形容詞であることが多く、まれに「生きもの」を表す名詞（男性ないし中性）としての用例が見られる。後期ウパニシャッドになると、形容詞と名詞、どちらの用法も一般的となる（例えば KaṭhU 4.5, MaitU 6.19, PraśU 5.5 など）。ただしウパニシャッドで、『マヌ法典』終章の「個体存在の魂」に近い意味をもつと思われる例は、『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』に一つ見られるだけである。ŚvetU 5.9: vālāgraśatabhāgasya śatadhā kalpitasya ca | bhāgo jīvaḥ sa vijñeyah sa cānantyāya kalpate || 「髪の毛の先を百に分けたものから、さらに百に分割されたものの一個、それがジーヴァ [の大きさ] であると知られるべきである。そしてそれは無際限の状態に適合している」。『ヤージュニャヴァルキヤ法典』（Yājñyavalkya-Dharma-Śāstra〔YājDhŚ〕）3.131 では、『マヌ法典』と同じく、jīva-が再生・輪廻の主体となる「個体存在の魂」を意味している。

また消散すると言われる²⁴。その上で、次に示される MānDhŚ 18–23 の教説はとりわけ重要である。そこでは、人の死後の行方（天界あるいはヤマの世界）が決定される仕組みを、次のように説明している。

[8] MānDhŚ 12.18–23

18. so 'nubhūyāsukhodarkān doṣān viṣayasaṅgajān |

vyapetakalmaṣo 'bhyeti tāv evobhau mahaujasau ||

対象への執着から生じた、不快を引き起こす諸々の過失を経験してから、汚れが離れ去った彼（ジーヴァ）²⁵は、他ならぬこの大威力をもつ両者²⁶（クシェートラジュニャとブータートマン）に近づいて行く。

19. tau dharmam paśyatas tasya pāpam cātandritau saha |

yābhyām prāpnoti saṃpṛktaḥ pretyeḥ ca sukhāsukham |

〔ジーヴァが〕この世で、そして死んでからもそれらと結合して楽と苦を得る、そのような両者（クシェートラジュニャとブータートマン）は、一緒に、彼（ジーヴァ）の正しい行いと罪とを倦むことなく見ている。

20. yady ācarati dharmam sa prāyaśo 'dharmam alpaśaḥ |

tair eva cāvṛto bhūtaiḥ svarge sukhām upāśnute ||

もし彼（ジーヴァ）が全体として正しいこと（ダルマ）を行い、正しくないこと（アダルマ）をわずかに〔行う〕なら、他ならぬかの〔五〕元素に包まれ、天界において楽を享受する。

²⁴ MānDhŚ 12.16–17: 16. pañcabhya eva mātṛābhyah pretya duṣkṛtīnām nṛṇām | śarīraṃ yātanārthīyam anyad utpadyate dhruvam || 「死後、悪をなした人間たちのために、苦痛を受けるための別の堅固な身体が、他ならぬ五つの元素から生じる」。17. tenānubhūya tā yāmīḥ śarīreṇa yātanāḥ | tāsv eva bhūtamātrāsu pralīyante vibhāgaśaḥ || 「この身体で、ヤマによるかの諸々の責め苦を経験してから、他ならぬかの〔五〕元素の中に、〔悪をなした人間たちは〕部分ごとに解消する」。

²⁵ 本詩節の主語「彼」(saḥ) は、先行する 12.14–15 で「ジーヴァ」を意味した tad- の男性単数形が、ここで再び同じ意味で用いられていると解釈した。これを修飾する vyapetakalmaṣa-（汚れの離れ去った）と同義の vītakalmaṣa-（汚れが去った）という形容詞が、12.22 で同様に jīva- を修飾している。

²⁶ tāv evobhau（ほかならぬかの両者）は、先行する 12.14 にある tāv ubhau、つまり mahān と kṣetrajaṇas を再び指示していると考えてよいだろう。

21. **yadi tu prāyaśo 'dharmaṃ sevate dharmam alpaśaḥ |
tair bhūtaiḥ sa parityakto yāmīḥ prāpnoti yātanāḥ ||**

しかし、もし彼が全体として正しくないこと（アダルマ）に従事し、正しいこと（ダルマ）にわずかに〔従事する〕なら、彼（ジーヴァ）は、そのような（天界の樂を享受するような）〔五〕元素から捨て去られ、ヤマによる諸々の責め苦を得る。

22. **yāmīs tā yātanāḥ prāpya sa jīvo vītakalmaṣaḥ |
tāny eva pañca bhūtāni punar abhyeti bhāgaśaḥ ||**

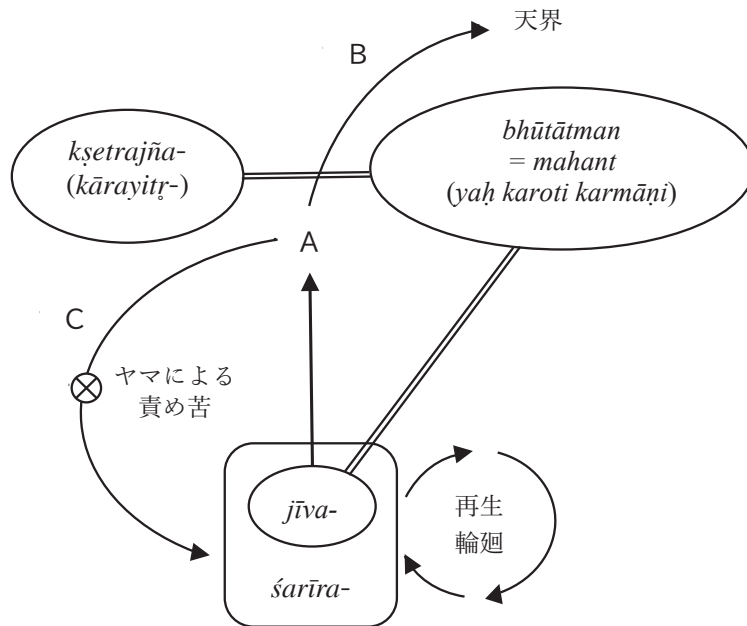
これらヤマの責め苦を得てから、汚れの去った彼ジーヴァは再び、部分ごとにかの五元素へと至る。

23. **etā dr̥ṣṭvāsya jīvasya gatīḥ svenaiva cetasā |
dharmato 'dharmataś caiva dharme dadhyāt sadā manaḥ ||**

このジーヴァの、他ならぬダルマとアダルマによるこれらの〔死後の〕行方を見て、〔人は〕他ならぬ自らの思考力によって、常々ダルマに留意すべきである²⁷。

ここでは、個体存在の自己「ジーヴァ」よりも高次のアートマンであるクシェートラジュニャとブータートマンとが、ジーヴァによる善悪の行いを絶えず見ていると説明される（MānDhŚ 12.19）。さらに、両者が見てきた行いの善悪の比重に応じて、死者の行方（天界あるいはヤマの世界）が決まるとも言われている（MānDhŚ 12.21）。この教説は、シャクンタラーの「内部にいるアートマン（プルシャ）が人の行いを監視している」（MBh 1.68.27–28）、および「クシェートラジュニャが、その人の行いに満足すれば悪しき死後の行方を免れ、満足しなければヤマの責め苦を受ける」（MBh 1.68.30–31）といった発言の内容と、ある程度の共通性を示している。上に引いた『マヌ法典』の説明に基づく「自己の構造」および「死後の行方と再生のプロセス」は、おおむね次のような図にまとめることができよう（図中の二重線は、クシェートラジュニャとブータートマン、そしてジーヴァとが相互につながっていることを示す）。

²⁷ ダルマとアダルマに起因する死後の行方については、類似の教説が MānDhŚ 6.64 に見られる。



- 注記
- A 身体を離れた死者がクシェートラジュニヤとブータートマンの元へ至る。
 - B 生前に善行の多かった者は天界へ行く。
 - C 生前に悪行の多かった者はヤマの責め苦を受けた後、再び身体に入り再生・輪廻する。

図1 『マヌ法典』が説く自己の構造、死後の行方と再生 (MānDhŚ 12.12-23)

さて、上に述べたような共通性は見られるものの、「図1」を見れば明らかなおとおり、『マヌ法典』終章と『マハーバーラタ』のシャクンタラー物語とでは、そこで語られる「自己の構造」に大きな違いがある。前者では、レベルの異なる二種類の内なる自己 (*kṣetrajñā-*、*bhūtātman-*) と、身体と結合して再生・輪廻する低次の自己 (*jīva-*) という、いわば「二層・三種類」の構造が想定されている。これに対し、後者は「内部の自己 (= 自己の本体)」と「日常的な自己」という二種類でとらえている。内部の（高次の）自己を指すのに「クシェートラジュニヤ」という名称を使う点では共通するが、シャクンタラーの言葉では、それが「証人」(*sākṣin-*)、「内部にいるプルシャ」(*antarapūruṣa-*)、「古の苦行者」(*muni-purāṇa-*) などとも呼ばれている。これらの名称が『マヌ法典』終章の教説に見られないことも留意すべき点であろう。

以下では、こうした隔たりを埋める情報として、『マヌ法典』の別の章から注目すべきテキストを取り上げ、シャクンタラー物語との関係を考察していく。

4. 『マヌ法典』第8章に示される「裁判長の勧告」

『マヌ法典』第8章は、法廷における訴訟 (vyavahāra-) の手続きを主題としている。訴訟では、係争事案について目撃情報などをもつ証人 (sākṣin-) を召喚し、「証人尋問」 (sākṣipraśna-) を行うことが多い。その冒頭において、裁判長は証人に対し「真実のみを語り、決して虚偽を語ってはならない」という旨の勧告を、所定の文言により述べることとなっている。その文言は次のように定式化されているが、実はここに、『マハーバーラタ』でシャクンタラーが口にする言葉との結びつきが見られる。

[9] MānDhŚ 8.80–86

80. yad dvayor anayor vettha kārye 'smimś ceṣṭitaṃ mithaḥ |

tad brūta sarvaṃ satyena yuṣmākaṃ hy atra sākṣitā ||

何であれ汝が知る、本事案についてこの兩人により相互になされた行動、それを全て真実に即して述べよ。ここでは、[それが汝の] 証人としての務めであるから。

81. satyaṃ sākṣye bruvaṇ sākṣī lokān āpnoti puṣkalān |

iha cānuttamāṃ kīrtiṃ vāg eṣā brahmapūjitā ||

証言に際して真実を述べる証人は [死後に] 美しい世界 (天界) を、またこの世では無上の名声を獲得する。この言葉はブラフマンによって恭敬されている。

82. sākṣye 'nṛtaṃ vadan pāśair badhyate vāruṇair bhṛśam |

vivaśaḥ śatam ājātis tasmāt sākṣyaṃ vaded ṛtam ||

証言に際して不実を語る者は、ヴァルナの輪縄たちによって、百生のあいだ否応なしに厳しく縛られる。それゆえ、正しい証言を語るべきである。

83. satyena pūyate sākṣī dharmāḥ satyena vardhate |

tasmāt satyaṃ hi vaktavyaṃ sarvavarṇeṣu sākṣibhiḥ ||

真実によって証人は浄められ、真実によって功德は増大する。それゆ

え、全種姓の証人たちにより、まさに真実が語られるべきである。

84. ātmaiva hy ātmanaḥ sākṣī gatiḥ ātmā tathāātmanaḥ |

māvamaṁsthāḥ svam ātmānam nṛṇāṁ sākṣiṇam uttamam ||

実に、ほかならぬアートマンが自己 (ātman-) の証人である。同様に、アートマンが自己 (ātman-) の庇護所である。自らのアートマンを、人間たちにとって最高の証人を、汝は軽視することなかれ (*māvamaṁsthās*²⁸)。

85. manyante vai pāpakṛto na kaś cit paśyatīti naḥ |

tāṁs tu devāḥ prapaśyanti svasyaivāntarapūruṣaḥ ||

悪行をなす者たちは「我ら [の所業] を誰も見ていない」と考えるのだ。しかし神々が、[そして] ほかならぬ自身の内部にいるプルシャ (*antarapūruṣa-*) が彼らを見つめている。

86. dyaur bhūmir āpo hṛdayaṁ candrārṁkāgniyaṁānilāḥ |

rātriḥ saṁdhye ca dharmaś ca vṛttajñāḥ sarvadehinām ||

天、地、水たち、心 (*hṛdaya-*)、月、太陽、火、ヤマ (閻魔)、風、夜と二つの [昼夜の] 結び目 (黎明と黄昏)、さらにダルマが、身体ある全ての者たちの行いを知る者である。

『マハーバーラタ』におけるシャクンタラーの言葉の一部は、明らかに、この裁判長による勧告の文言(とくに太字部分)と共通している。例えば、シャクンタラーがドゥフシャンタに告げた「アートマンを軽視してはいけません」(MBh1.68.25d: *mātmānam avamanyathās*) という言葉は、裁判長の「自らのアートマンを軽視することなかれ」(MānDhŚ8.84c: *māvamaṁsthāḥ svam ātmānam*) と酷似している。また、シャクンタラー物語にある次の二詩節は、上に引いた『マヌ法典』の 85～86 詩節の語句とほぼ同じである。

[再掲] MBh1.68.28–29

28. manyate pāpakaṁ kṛtvā na kaś cid vetti mām iti |

vidanti cainaṁ devāś ca svaś caivāntarapūruṣaḥ ||

²⁸ *avamanyathās*: 第 4 類動詞 *ava-√man-*「軽視する、侮る」、s-アオリスト指令法 (injunctive)、2 人称単数中動態。

悪行をしていながら、「私〔の所業〕を誰も知りもしない」と人は考えます。〔しかし〕その者〔の所業〕を神々が、そして自分の内部にいるプルシャ (*antarapūruṣa-*) が知っています。

29. *ādityacandrāv anilānalau ca dyaur bhūmir āpo hṛdayaṃ yamaś ca |*
ahaś ca rātriś ca ubhe ca saṃdhye dharmaś ca jānāti narasya vṛttam ||
 太陽と月、風と火、天、地、水たち、心 (*hṛdaya-*)、ヤマ (閻魔)、さらに昼、夜、二つの〔昼夜の〕結び目 (黎明と黄昏)、そしてダルマが、人間の行いを知るのです。

このような語句や表現の共通性は、これに続く箇所での裁判長の勧告にも見られる。まず、身を清めて出廷した裁判長が、バラモンの証人に対しては「語れ」(*brūhi*) とだけ言い、クシャトリヤには「真実を語れ」(*satyaṃ brūhi*) と言う、等々の規定が示される (*MānDhŚ* 8.87–88)。そして、裁判長による勧告文の提示が以下のように再開される。

[10] *MānDhŚ* 8.89–96

89. *brahmagho ye smṛtā lokā ye ca strībālāghātinaḥ |*
mitradruhaḥ kṛtaghnasya te te syur bruvato mṛṣā ||
 バラモン殺害者や女性・幼児の殺害者、友人を裏切る者、忘恩の者にとっての〔報い〕として伝承されている〔悪しき〕諸世界、そのいずれもが、嘘を語る者にとっての〔世界〕となろう。
90. *janmaprabhṛti yat kiṃ cit puṇyaṃ bhadra tvayā kṛtam |*
tat te sarvaṃ śuno gacched yadi brūyās tvam anyathā ||
 もし汝が〔事実と〕異なるように語るならば、幸ある者よ、何であれ汝によって誕生以来なされた善きこと、〔本来は〕汝のものであるその全てが、犬のものになってしまうだろう。
91. *eko 'ham asmīty ātmānaṃ yas tvam kalyāṇa manyase |*
nityaṃ sthitas te hṛdy eṣa puṇyapāpekṣitā muniḥ ||
 吉祥なる者よ、「私は一人だ」と汝が自分のことを考えても、善と悪の観察者であるこの苦行者 (*muni-*) が、汝の心臓に住んでいる (*hṛdi stithas*)。

92. **yamo vaivasvato devo yas tavaiṣa hṛdi sthitaḥ |**

tena ced avivādas te mā gaṅgām mā kurūn gamah ||

ヴィヴァスヴァントの息子であるこのヤマ神が汝の心臓に住んでいる。
もし汝に、[悪行をめぐる] 言い争いが彼との間に起こらないなら、[罪
を浄める聖地である] ガンジス河にもクル平原にも、汝は行くことな
かれ (*mā gamas*²⁹: 行く必要はない)。

93. **nagno muṇḍaḥ kapālena ca bhikṣārthī kṣutpipāsitaḥ |**

andhaḥ śatrukulaṃ gacched yaḥ sākṣyam anṛtaṃ vadet ||

人が証言として不実を語るならば、裸にされ、髪を剃られ、飢えと渴
きにさいなまれ、盲目となり、そして物乞いのために土器をもって敵
対者の家に行くことになろう。

94. **avākśirās tamasy andhe kilbiṣī narakam vrajet |**

yaḥ praśnam vitathaṃ brūyāt pṛṣtaḥ san dharmaniścaye ||

尋問されていて、問いに対し事実と反することを語れば、有罪人とな
り、頭を真っ逆さまにして、盲目の [ような] 暗闇にある地獄に行く
ことになろう。

95. **andho matsyān ivāśnāti sa naraḥ kaṇṭakaiḥ saha |**

yo bhāṣate 'rthavaikalyam apratyakṣam sabhāṃ gataḥ ||

法廷に赴き、不正確なこと、目にしてもいないことを話す、そのよう
な人は、あたかも盲人が、棘となる骨とともに魚を食べるようである。

96. **yasya vidvān hi vadataḥ kṣetrajño nābhiśaṅkate |**

tasman na devāḥ śreyāmsam loke 'nyam puruṣam viduḥ ||

実に、クシェートラジュニヤがその人の陳述を知っても疑惑を抱かな
いなら、世界でその人よりも優れた別の人間を神々は知らない。

シャクンタラーの言葉は、明らかに上掲文例 [10] の中にも平行文を持
っている。例えば、以下に再掲する『マハーバーラタ』の二詩節 (MBh
1.68.27, 30) のうち太字部分が、上に引いた『マヌ法典』の 91、92 および
96 詩節と同じ、ないしほぼ同じ語句である (MBh 1.68.30 の共通語句は
『マヌ法典』の 92 詩節と 96 詩節にまたがって見られる)。

²⁹ *gamas*: 第 1 類動詞√gam-, a-アオリスト指令法 (injunctive)、2 人称単数能動態。

MBh 1.68.27 (cf. MānDhŚ 8.91)

eko 'ham asmīti ca manyase tvam na hr̥cchayaṃ vetsi munim purāṇam |
yo veditā karmaṇaḥ pāpakasya tasyāntike tvam vṛjinaṃ karoṣi ||

「私は一人だ」と貴方は考えています。[しかし]心臓に住む(*hr̥cchaya-*)、
 罪なる行為の認知者である古の苦行者(*muni-*)を、貴方は知りません。
 彼のすぐそばで、貴方は非道なことをしているのです。

MBh 1.68.30 (cf. MānDhŚ 8.92&96)

yamo vaivasvatas tasya niryātayati duṣkṛtam |
hr̥di sthitaḥ karmasākṣī kṣetrajño yasya tuṣyati ||

心臓にいる行為の証人たるクシェートラジュニヤがその者に満足すれば、
 ヴィヴァスヴァントの息子ヤマは、その者の悪業を持ち去ってくれます。

こうして平行する文や語句が複数見られることから、『マハーバーラタ』
 におけるシャクンタラーの言葉と『マヌ法典』における裁判長の勧告との
 間には、何らかの歴史的関係があったと考えてよいだろう。とくに、
antarapūruṣa-（内部にいるプルシャ：MBh 1.68.28, MānDhŚ 8.85）という
 語彙は一種の稀少語形であり、今のところ両文献のこの箇所にはしか発見さ
 れていないことも、この判断を支持する。

では、両者の関係はどのようなものだろうか。まず着目すべきは、シャ
 クンタラーが語る言葉には、全体として、法典文献との平行文が少なから
 ず見られることである。上に言及したものを除いても、シャクンタラー物
 語のうち次の三詩節（MBh 1.68.38, 69.21-22）は、『マヌ法典』のほか、
 『ヴィシュヌ法典』（Viṣṇu-Smṛti [ViSm]）や『ナーラダ法典』（Nārada-
 Smṛti [NārSm]）の一部とほぼ完全な一致を示している。

MBh 1.68.38 = MānDhŚ 9.138 = ViSm 15.44

punnāmno narakād yasmāt pitaraṃ trāyate sutaḥ |
tasmāt putra iti proktaḥ svayam eva svayambhuvā ||

「プト (*put-*)」という名の地獄から息子は父を救う (*trāyate*) から「プ
 トラ (*putra-*息子)」と、ほかならぬスヴァヤンブー神自身によって呼ば
 れた。

MBh 1.69.21 = NārSm 2.1.193 (1.211)

varam kūpaśatād vāpī varam vāpīśatāt kratuḥ |
varam kratuśatāt putraḥ satyaṁ putraśatād varam ||

池は百の井戸に勝り、祭祀は百の池に勝り、息子は百の祭祀に勝り、真実は百の息子に勝る。

MBh 1.69.22 = NārSm 2.1.192 (1.212) = ViSm 8.36

aśvamedhasahasraṁ ca satyaṁ ca tulayā dhṛtam |
aśvamedhasahasrād dhi satyam eva viśiṣyate ||

千のアシュヴァメーダ（馬祀）と一つの真実とが天秤にかけられれば、実に、千のアシュヴァメーダよりも一つの真実こそが優れている。

これらは、法典文献の中では前後にトピックの共通する詩節があり、文脈的な連繋がはっきりしている。いっぽうシャクンタラーの言葉においては、前後の詩節とのつながりは必ずしも明瞭ではなく、断片的に挿入された観がある³⁰。そうしたことから、シャクンタラーの言葉のうち法典のテクストと共通する部分は、『マハーバーラタ』編纂期に存在していた法典伝承から、物語の文脈に合わせて適宜とり入れられたと想像される。

その上で興味深いのは、ここまでの検討によりシャクンタラーの言葉と語句の一致が確認された『マヌ法典』第8章の六詩節（MānDhŚ 8.84–86, 91–92, 96）は、他の法典に平行文はおろか、類似する語句や表現さえ見られないことである。裁判長による勧告の文言自体は他の法典においても定

³⁰ 例えば MānDhŚ 9.138 (=ViSm 15.44) は、家を継承する息子の種類やその相続権に関する規則集(9.127–186)に含まれており、前後の文脈と有機的につながっている。それに対し『マハーバーラタ』の中では、シャクンタラーがドゥフシャンタに、妻を大事にすべきことを訴える文脈（MBh 1.68.36–50）の中で、二詩節（1.68.37–38）だけが息子の意義に言及している。なお、南方伝本全般（S）と一つの北方伝本（K4）では、MBh 1.68.38 の直後に、MānDhŚ 9.137 (=ViSm 15.46) と a-c パーダが一致する詩節（下掲）を挿入している：

MBh 1.68.38d*: putreṇa lokāñ jayati putreṇānantyam aśnute |
atha putrasya putreṇa modante prapitāmahāḥ ||
MānDhŚ 9.137: putreṇa lokāñ jayati putreṇānantyam aśnute |
atha putrasya putreṇa bradhnyāpnoti viṣṭapam ||

めがある³¹。またそのうち多くのパッセージが『マヌ法典』における勧告の文言とも共通している。にもかかわらず、「内なる証人」の観念を含む文言は、少なくとも現存文献の中では『マヌ法典』にしか見られない。

おそらく、『マヌ法典』第8章に見られる「内なる証人」の観念は同じ法典の終章で説かれる教え、つまり「アートマン（クシェートラジュニャおよびブータートマン）が人の善悪の行いを見、死後の行方に影響を及ぼす」という教説（MānDhŚ 12.12–23）と思想的に繋がっていると想像される。先述のとおり、その終章の教え自体『マヌ法典』に固有のものである。それと思想的に連繫しているとすれば、第8章にある六詩節（MānDhŚ 8.84–86, 91–92, 96）に類似するパッセージが他の法典に見られないのも自然なことと見ることができよう。

上に見てきた状況を総合的に勘案すると、『マヌ法典』第8章に共通語句をもつシャクンタラーの言葉は、おそらくこの法典か、その周辺の（あるいはそれに先行する）伝承から借用されたものと想像される³²。

ところで、『マヌ法典』第8章に見られる「内なる証人」の観念が、同法典の終章に説かれる教えと関連している可能性は高いものの、双方の言説を比較すると、そこには「自己の構成」の捉え方に違いがある。終章では、レベルの異なる二つの内なる自己（*kṣetrajñā-*、*bhūtātman-*）と、身体

³¹ 証人に対する裁判長の勧告の規定：ĀpDhS 2.11.29.7–10; GauDhS 13.12–23; BaudhDhS 1.19.10–12; VasDhS 16.32–34, ViDhS 8.19–37; YājDhŚ 2.73–75; KĀŚ 11.3.34–37. 裁判長の勧告に関する概説として Kane (1968–1977 III: 342–343) 参照のこと。なお、いくつかのダルマニバンダ文献（Dharma-Nibandha、諸法典の規定をトピックごとに集めた「ダイジェスト本」）には MānDhŚ 8.91–92 と同じ詩節が『ナーラダ法典』の詩節として挙げられている（例えば Vācaspatimiśra 著 Vyavahāracintāmaṇī 364 [Rocher 1956] を参照）。しかし現行の『ナーラダ法典』テキストには当該詩節が存在しない。

³² シャクンタラー物語のテキストを作った者が、『マヌ法典』から直接に当該語句を借用した可能性はあるが、そうでない可能性も捨てきれない。『マハーバーラタ』第1巻は、この叙事詩の中では主要部より遅れて編纂されたと考えられるが、『マヌ法典』との先後関係については不分明である。『マヌ法典』と『マハーバーラタ』の平行箇所を調査した Hopkins 1901: 17–23 は、両文献の編纂がほぼ同時期に平行してなされたと推測しつつ、両者の間にはっきりした先後関係を想定しない。『マハーバーラタ』を構成する諸巻（*parvan-*）の先後関係、ないし大まかな編纂時期の推定については、Witzel 2005: 59–70 参照。

に入りこみ再生・輪廻する低次の自己 (*jīva-*) という、いわば「二層・三種類」が想定されている。これに対し第 8 章では、シャクンタラー流の自己観と同じく、内部の自己(=自己の本体:*ātman-*、*antarapūruṣa-*、*kṣetrajña-*、*muni-*) と日常的な自己という二種類の構成となっている。同一法典の中で、両章に「自己の構成」の捉え方の違いがあるのはなぜだろうか。この問いへの答えを探る手掛かりとして、次に『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』の一部をとり上げたい。

5. 『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』が説く自己の構成

後期ウパニシャッドの一つ『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』には、『マヌ法典』第 8 章と終章の双方に共通性をもつ自己の観念が見られる³³。例えば以下に紹介するパッセージ (MaitU 2.5=5.2) では、最高次の自己である アートマン (プルシャ) の一部が「クシェートラジュニヤ」あるいは「全てを見るプラジャーパティ」などと呼ばれている。クシェートラジュニヤは『マヌ法典』第 8 章と終章、そして『マハーバーラタ』シャクンタラー物語でも、内なる (高次の) 自己を指す語として用いられていたものである。また、このウパニシャッドがクシェートラジュニヤを「活動させる者」(*pracodayitr-*) として位置づける点は、『マヌ法典』終章がクシェートラジュニヤを「行為させる者」(*kārayitr-*, MānDhŚ 12.12) と述べていたことに類似する。

[11] MaitU 2.5=5.2 (Buitenen 1962: 100, 106)

... atha yo ha khalu vāvaitasya so 'mśo 'yaṃ yaś cetanamātrah
pratipurūṣaṃ **kṣetrajñaḥ** saṃkalpādhyavasāyābhimānalingaḥ prajāpatir
viśvākṣas tena cetanenedaṃ śarīraṃ cetanavat pratiṣṭhāpitam **pracodayitā**
caiṣo 'sya iti | ...

…… さて、じつにこれ (プルシャ) の一部である者、各人に純粋な知性としてある者、彼がクシェートラジュニヤであり、意志と決心と自

³³『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』に見られるアートマン (プルシャ) の観念を詳しく検討したものとして村上 1987: 116–133、また本章で取り上げる箇所を含む「自己の構成」を解説したものとして村上 1991: 59–70 を参照のこと。

意識を特徴とする。一切を見るプラジャーパティ (*prajāpatir viśvākṣas*) であり、彼の知性によって、この身体 (*śarīra-*) は知性を持つ者として確立せしめられる。また彼はこれ(身体)を活動させる者 (*pracodayitr-*) である」と [学匠クラトゥ・プラジャーパティは語った]。

さらに次の一節では、『マヌ法典』終章で内なる自己のうちの一つ「ブータートマン」が説明される。ブータートマン (*bhūtātman-*) は、『マヌ法典』終章において、クシェートラジュニヤより低位にありながら、個体存在の自己であるジーヴァより上位に位置づけられる、内部の自己の一種であった。しかし『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』では、そのブータートマンの位置づけが異なっている。

[12] MaitU 3.3 (Buitenen 1962: 102)

athānyatrāpy uktam — yaḥ kartā so 'yaṁ vai bhūtātmā | karaṇaiḥ
kārayitāntaḥpuruṣaḥ | atha yathāgnināyaḥpiṇḍo vābhibhūtaḥ kart bhīr
hanyamāno nānātvam upaity evaṁ vāva khalv asau bhūtātmāntaḥ-
puruṣenābhibhūto guṇair hanyamāno nānātvam upaiti | ...

次に、別の個所でも [以下のように] 説かれている。「行為者 (*kartr-*) である者、彼はじつにブータートマンである。内部のプルシャ (*antaḥpuruṣa-*) は、諸々の行為器官を通じて [ブータートマンに] 行為させる者 (*kārayitr-*) である。さて、火によって浸透された鉄の塊が、鍛冶工たちによって打たれながら様々な状態になるように、じつにそのように、内部のプルシャにより浸透されたブータートマンは、[三つの] グナによって打たれつつ、様々な状態になる。……」

ここでは、内部のプルシャ (*antaḥpuruṣa-*) が *kārayitr-* (行為させる者)、ブータートマンが *kartr-* (行為する者) であると述べられている。この説明は、『マヌ法典』終章が、クシェートラジュニヤを *kārayitr-*、ブータートマンを *kartr-* であるとした MānDhŚ 12.12 (文例 [7] 冒頭) の所説に一致する。上に引いた文例 [12] の中で「行為させる者」(*kārayitr-*) とされる「内部のプルシャ」は、先行箇所 of 文例 [11] で「活動させる者」(*pracodayitr-*) と言われていたクシェートラジュニヤと同じであろう。

なお、「内部のプルシャ」(*antaḥpuruṣa-*)という語は『マヌ法典』終章には見られないが、同法典第 8 章（およびシャクンタラー物語）には *antarapūruṣa-* の語形で表れている。このように、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』は、用語の面で『マヌ法典』の二つの章それぞれに共通性をもつ。ただし、「自己の構成」の捉え方について言えば、このウパニシャッドは、内部の自己 (*antaḥpuruṣa-*、*kṣetrajña-*) と、身体に結びついた低次の自己 (*bhūtātman-*) という二種類を想定する点で、『マヌ法典』第 8 章の方に近いようである。

文例 [12] の直前にあるパッセージ (MaitU 3.2³⁴) では、ブータートマンが「別の低次のもの」(*anyo 'paras*) であり、身体と結合して再生・輪廻する主体であると説明されている。この再生・輪廻の主体を、『マヌ法

³⁴ MaitU 3.2 (Buitenen 1962: 102): *asti khalv anyo 'paro bhūtātmākhyo yo 'yam sitāsitaḥ karmaphalair abhibhūyamānaḥ sadasadyonim āpadyata ity | avācīm vordhvām gatiṃ dvandvair abhibhūyamānaḥ paribhramati || asyopavyākhyānam: pañca tanmātrāṇi bhūtaśabdenocyante | atha pañcamahābhūtāni bhūtaśabdenocyante | atha teṣāṃ yat samudayas tac charīram ity uktam | atha yo ha khalu vāva śarīra ity uktam sa bhūtātmety uktam | athāsti *+tasyātmā bindur+ iva puṣkara iti | sa vā eṣo 'bhibhūtaḥ prākṛtaḥ guṇair iti | ato 'bhibhūtatvāt sammūḍhatvam prayātaḥ | sammūḍhatvād ātmasthaṃ prabhuṃ bhagavantaṃ kārāyitāraṃ nāpaśyat | guṇaughais tṛpyamānaḥ kaluṣīkṛtaś cañcalo lolupyamānaḥ prayāta iti | ... [Buitenen のテキストはアステリクス (*) 付きの個所で *tasyātmābindur* という読みを取り、注記に流布本テキスト (V) の読み *athāmṛto 'syātmābindur* を示す。]*

「じつに [高次のアートマンとは] 別の、低次のものとして「ブータートマン」と呼ばれるものがある。それは、明暗ある諸々の行為結果によって浸透されつつ、善あるいは不善の母胎に入ると言われる。一對のものにより浸透されつつ、下向きあるいは上向きの帰趣を徘徊すると言われる。これについて補足説明がある。「ブータ」の語によって五つの微細元素 (*tanmātra-*) が語られる。そして「ブータ」の語によって五つの大元素 (*mahābhūta-*) が語られる。そして、これらの集合であるもの、それが身体と言われている。そして、じつに身体の内にあると言われているもの、それがブータートマンであると言われる。さらに、それ (ブータートマン) のアートマンは、青蓮 [の葉] の上にある滴のよう [に別異] であると言われる。これ (ブータートマン) は、まさにプラクリティに属する [三] グナによって浸透されていると言われる。そこで、浸透された状態ゆえに、愚鈍状態に至っている。愚鈍状態ゆえに、自身のうちにある尊崇すべき支配者、行為させる者を観なかった。[三] グナの奔流によって満足させられており、汚染され、堅固でなく、動揺し、惑乱させられており、渴望を有し、熱中し、また自己に固執する状態に至っている。……」

典』終章は「ジーヴァ」と名づけ、それより上位にある（内部の）自己をブータートマンと呼んでいた。このように、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』と『マヌ法典』終章は、ブータートマンの位置づけが異なる。またこの違いこそが、「自己の構成」の差——前者では「二層・二種類」、後者では「二層・三種類」という差——を生みだしているとも言えよう。

「ブータ」(*bhūta-*)という語は、『マヌ法典』終章の教説で、ジーヴァの身体を構成する五つの元素(*bhūta-*)の意味で用いられていた(*MānDhŚ* 12.20–22)。またこれと同じ語義説明は、「注 32」に挙げた *MaitU* 3.2 のパッセージにも見られる。したがって、その「ブータ」という語を前分とするブータートマンという複合語も、本来は身体と結合した再生・輪廻の主体を示すものであったと想像される。『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』の用語は、その本来的な意味を反映したものであろう³⁵。そして『マヌ法典』終章では、そのブータートマンが、内部にある高次の自己の一種に格上げされ、もとはブータートマンと呼ばれていた低次の自己に「ジーヴァ」という別の名が付与されたと見ることができる。

文例 [11] [12] の説明をもとに、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』が説く自己の構成をまとめると、概ね次頁の「図 2」のようになろう（図中の二重線は、クシェートラジュニヤとブータートマンとが相互につながっていることを示す）。

ただし、ここで留意すべきは、*MānDhŚ* 12.12 の後半（文例 [7] 冒頭）が、*MaitU* 3.3（文例 [12]）の説明と同じく、ブータートマンを「行為する者」(*kartr-*)と説明していることである。この 12.12 後半の所言は、その後続く 12.13–15 で述べられる、ジーヴァを行為主体とする説明と調和していない。なぜこのような説明のブレが生じているのだろうか。この問いに対する答えは容易に見いだせない。ただし、一つの可能性として、12.12 後半は『マヌ法典』終章の編纂者たち自身の説ではなく、同時代で権威を認められていた説に言及した、ということも考えられなくはない。

³⁵ *bhūtātman-*という語は、紀元前後の比較的古い文献ではほぼ *MaitU*、*MānDhŚ*、*MBh* にしか現れない。左記の文献における同語の用例（とくに *jīva-*との比較）について、Johnston 1937: 48–51 参照。

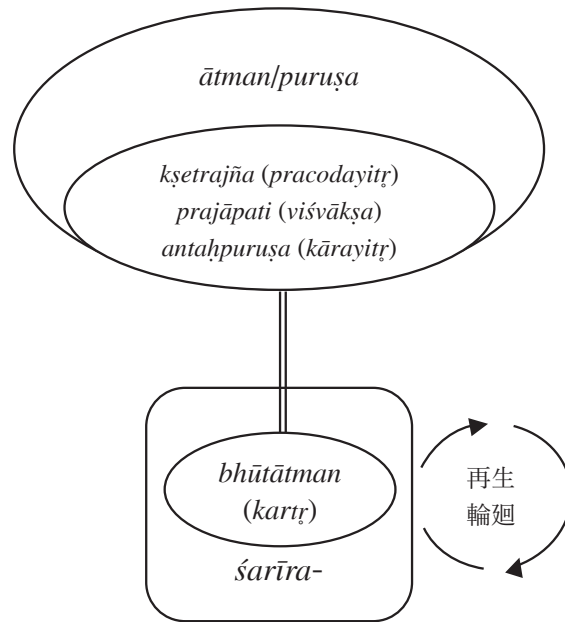


図2 『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』が説く自己の構成
(MaitU 2.5=5.2, 3.2-3)

というのも、MānDhŚ 12.12 の後半部分、つまり「いっぽう、諸々の行為をする者はブータートマンと、知者たちによって言われる」(yaḥ karoti tu karmāṇi sa bhūtātmocyate budhais) という文言の末尾には、「～と、知者たちによって (budhais) 言われる」と付言されているからである。『マヌ法典』全体において、budhais (知者たちによって) という表現は、この 12.12 以外、3.109 と 11.235 の二個所にしか見られない。それらの個所で budhais という語は、世間で権威を認められている教えや考え方に言及する場合に用いられている³⁶。これらと同じように、12.12 後半の所言も『マヌ法

³⁶ MDhŚ 3.109: na bhojanārthaṃ sve vipraḥ kulagotre nivedayet | bhojanārthaṃ hi te śaṃ san vāntāśīty ucyate **budhais** || 「バラモンは、食べ物を受け取る目的で、自身の家族や血統について（他者に）知らせるべきではない。なぜなら、その2つ（家系と血統の名前）を誇示する者は、**賢者たちによって**「吐瀉物を食べる者」といわれているからである」；MDhŚ 11.235: tapomūlam idaṃ sarvaṃ daivamānuṃ sukham | tapomadhyam **budhaiḥ** proktaṃ tapo'ntaṃ vedadarśibhis || 「ヴェーダを見る**賢者たちによって**、神々と人間の全幸福は、苦行を根とし、苦行を中間とし、苦行を終極とすると述べられている」。

典』自体の説と区別して述べられたものなのかもしれない。またそう考えれば、この 12.12 後半の所言が『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』の説明と共通することに合理性を見出すことができる。

ただし他の二箇所 (3.109 と 11.235) では、『マヌ法典』自体が、そこで言及する世間の (権威ある) 教え・考え方に順じている。それに対し、12.12 後半の所言 (権威ある説への言及?) は、それ以降の諸詩節における説明と符合していない点で、他の二箇所とは状況が異なることに注意が必要である。今は一つの推測として、『マヌ法典』終章の編者 (たち) が権威ある見解を尊重しつつ、その一部を「更新」する立場をとっており、ブータートマンを一段格上げして、その下にジーヴァを置いたという可能性を提起するにとどめたい³⁷。

こうして『マヌ法典』終章と『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』の教説を比較してみると、『マヌ法典』第 8 章の裁判長の勧告に見られる自己の捉え方は、やはり同法典終章のそれより、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』の方に近いことが確認される。ただし、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』には、裁判長の勧告 (およびそれと密な関係をもつシャクンタラーの言葉) が述べる「内なる証人」というアートマン (プ

³⁷ なぜ『マヌ法典』終章の教説にジーヴァの要素が導入されたかは不明であるが、今は二つの可能性を示唆しておく。第一は、『マヌ法典』終章の編纂期に、ジャイナ教や『マハーバーラタ』第 12 巻「解脱法品」(Mokṣadharmā-Parvan) で語られるような、ジーヴァを現世での行為主体とする思想が台頭しており (Johnston 1937: 44–47 参照)、それに影響を受けたという可能性である。第二は、『マヌ法典』終章の教説が、天界への入口に「二人の審査者」がいるという古い観念を反映している、という可能性である。『リグヴェーダ』をふくむ複数のヴェーダ文献には、死者が天界に入ろうとする際、その資格を審査する者が「二人」と述べられる。例えば RV10.14.7–12 (cf. AVŚ 18.2.12) によれば、ヤマの天界に至る道を神犬サラマーの子孫である二頭の犬が守っており、資格のない者を追い払うという (阪本 (後藤) 2015: 45–46, Macdonell 1897: 173 参照)。また ŚB-M 1.9.3.1–2 は、太陽と聖火という「二つの火」が天界への道を守っていると述べる。同様の考え方は、JB 1.17–18 (季節と太陽)、KauṣU 1.2–7 (月とブラフマー) にも見られる (阪本 (後藤) 2015: 56–60, 68–70 参照)。『マヌ法典』終章は、こうした「二人の審査者」という古い観念を踏襲する形で、ブータートマンをクシェートラジュニヤとともに死者を審査する者に組み入れたのかもしれない。また同時に、審査される側として、同時代の新思想において再生・輪廻の主体に位置づけられていたジーヴァを採用した、という可能性が考えられよう。

ルシャ)の能動的な役割が全く語られていない。証人に対する裁判長の勧告でも、ドゥフシャンタにシャクンタラーが訴える言葉においても、重要なのは「アートマン(プルシャ)が人の善悪の行いを見、死後の行方に影響を及ぼす」という考え方である。そしてその考え方を支える理論は、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』ではなく、『マヌ法典』終章でのみ説かれている。クシェートラジュニヤの下にある自己を一つだけとするか、あるいはそれをブーアートマンとジーヴァの二つに分けるかという相違点を除けば、『マヌ法典』第8章における裁判長の勧告は、やはり全体として『マヌ法典』終章の教えと軌を一にしている。

第8章にある裁判長の勧告と終章の教説との間で、なぜ自己の構成のあり方が異なるのかという点について、明確な答えを見出すことは難しい。その上で、今は二つの可能性を示唆しておきたい。一つ目は、第8章の編纂時に終章のテキストが現行のものといくらか違っていた可能性である。つまり「自己の構成」と「死後の行方、再生の様相」に関する教説が当時は発展途上にあり、現行のような「二層・三種類」の自己ではなく、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』が伝えるような、よりシンプルなものであったということである。二つ目は、第8章の編者が、あえて自己の構成をシンプルなものに変更したという可能性である。つまり、終章が説く「自己の構成」は現行と同じであったが、その複雑さが、証人に事実を語るよう促すという第8章の文脈には適さないと考えられたかもしれない。そして「自己の構成」については、『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』が伝えるような、よりシンプルな捉え方を採用したということである。

ただし、二つ目の可能性を想定する場合、『マヌ法典』第8章の編者が『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』から直接に影響を受けたとは限らない。一般にウパニシャッド文献は法典文献より古いと考えられているが、『マイトラーヤニーヤ』は、古ウパニシャッドのうち後期に属し、基本的には紀元前のさほど古くない時期に成立したと推定される。また Buitenen 1962 は、このウパニシャッドがもとは別々にあった二つのテキストの複合であり、またパートにより年代が異なることを示した。彼の研究によれば、上に取り上げたテキスト[11](MaitU 2.5=5.2)と[12](MaitU 3.3)は比較的后代のパートに属する。その具体的な成立時期は不明だが、

『マヌ法典』の編纂が前 1 世紀から後 2～3 世紀頃とされること (cf. Bronkholst 2012: 136–137, 146) に鑑みれば、このウパニシャッドが『マヌ法典』と同時代か、部分によっては『マヌ法典』より後に成立したという可能性もある。もし『マヌ法典』第 8 章の編者が裁判長の勧告に、『マヌ法典』終章のそれよりシンプルな「自己の構成」の観念を採り入れたとしても、それは『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』自体からではなく、それに先行する何らかの伝承から採られたものかもしれない³⁸。

6. 本論のまとめ

ここまでの考察を通じて、我々はインド固有の「内なる証人」という観念の起源を検討してきた。そこで明らかになった事柄の要点を、時系列に沿ってまとめれば、おおよそ次のようになる。

1. 初期・中期ウパニシャッド

「内なる証人」を特徴づける三つの観念のうち、「自己の本体であるアートマン（プルシャ）は人の内部（とくに心臓）にいる」、および「アートマン（プルシャ）は、人の行為を常に見ている」という観念は、すでに初期・中期ウパニシャッドに見出される。一方で、「アートマン（プルシャ）は、人の行いの善悪に応じて、その死後の行方に影響を及ぼす」という観念は、ウパニシャッドの段階ではまだ見られない。ただし、その観念の萌芽となるいくつかの（とくに太陽をめぐる）思考が、ウパニシャッドに見出される。[第 2 章参照]

2. 『マヌ法典』

「内なる証人」を構成する観念のうち、「3. アートマン（プルシャ）は、人の行いの善悪に応じて、その死後の行方に影響を及ぼす」とい

³⁸ なお、『マヌ法典』が黒ヤジュルヴェーダのマイトラーヤニーヤ派と関係があったかどうかについては、19 世紀から多くの議論がなされている。かつては無関係であったとする見解が有力だったが、Bronkhorst 1985 や Jamison 2000 により、両者に関係のあった可能性が文献上の論拠とともに提起されている。ただし現在のところ、その関連性を示す実例が少なく、明確な結論を得るに至っていない。本論者が指摘した、「自己の構成」に関する『マヌ法典』と『マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド』の見解の共通性は、この議論に関わる新たな情報を提供するものとなるかもしれない。

う観念は、『マヌ法典』に現れる。とくに第8章（訴訟論）の裁判長による勧告の文言と、第12章（終章）における存在論（自己の構成および輪廻・再生の理論）は、それぞれの文脈に即した形でこの観念を明確に述べている。[第3章・第4章参照]

なお、『マヌ法典』では、第8章と第12章の間に、「内なる証人」の位置づけに関わる「自己の構成」の捉え方がやや異なっている。この「自己の構成」の捉え方について言えば、第8章は後期ウパニシャッドの一つ『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』の所説と共通性をもつ。『マヌ法典』における「内なる証人」の観念が生まれる過程では、このウパニシャッドの伝承（あるいはそれに近い何らかの伝承）も関係していた可能性がある。[第5章参照]

3. 『マハーバーラタ』第1巻「シャクンタラー物語」

シャクンタラーが語る言葉には、『マヌ法典』第8章の判長による勧告の文言との明確な共通性が見られる。おそらく、『マハーバーラタ』第1巻の編纂者たちは、『マヌ法典』かそれに近い何らかの法典伝承によって、「内なる証人」の観念や、それを述べる法典の文言を知っていただろう。また、その知識を活用する形で、シャクンタラーがドゥフシャンタを非難する場面のテキストは作られたものと推測される。

[第1章・第4章参照]

おわりに

論考の締めくくりとして、本論で取り上げたシャクンタラー物語とは別に、『マハーバーラタ』で「内なる証人」の観念がどのように表れているかを簡単に紹介しておきたい。まず、『マハーバーラタ』第13巻に収められた「ビーシュマによる教説」のうち、次のパッセージにこの観念が見うけられる。

[13] MBh 13.2.72–73

72. pr̥thivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam

| buddhir ātmā manaḥ kālo dīśaś caiva guṇā daśa ||

大地、風、虚空、水たち、そして第五の光、ブッディ（覚）、アートマン、マナス（意）、時間、諸方位が、ほかならぬ十のグナ（要素）であ

る。

73. nityam ete hi paśyanti dehinām dehasamśritāḥ |

sukṛtaṁ duṣkṛtaṁ cāpi karma dharmabhṛtām vara ||

実にこれらは身体をもつ者たちを、また〔それらがなす〕善行も悪行も、〔行為者の〕身体に宿っていつも見ている。ダルマを保持する者たちのうち最上の者よ」

ここでは、「内なる証人」が十種のグナ（存在の構成要素）として述べられている。大地や風、水たちなど、自然体に属する多くのものを「行為の証人」として列挙する点で、すでに見た MānDhŚ 8.86（文例〔9〕）や MBh 1.68.29（文例〔1〕）の説に近いと言えよう。さらに、ビーシュマが別の個所で述べる以下の言葉も注目される。このうち前半（ab）は、MBh 5.34.62cd および 6.28.5cd と共通しており、さらに後半は、MānDhŚ 8.84 の前半（文例〔9〕： **ātmaiva hy ātmanaḥ sākṣī gatiḥ ātmā tathāātmanaḥ**）と半ば同じである。このように、『マハーバーラタ』には「内なる証人」のイメージが複数の巻にわたって散見されるのである。

〔14〕 MBh 13.6.27

27. **ātmaiva hy ātmano bandhur ātmaiva ripur ātmanaḥ** |

ātmaiva cātmanaḥ sākṣī kṛtasyāpy akṛtasya ca ||

アートマンは自分の親族であり、同じアートマンが自分の敵である。そしてほかならぬアートマンが、自分の行ったこと、そして行わなかったことの証人である。

原實は“Divine Witness”と題した論文（Hara 2009）において、その居場所が人の内部か、あるいは外部かにかかわらず、「神的な存在が人々の行いを見ている」という観念の出現例を、多くの文芸作品から集め紹介している。その中には、本論考が取り上げた「内側から人の行いを見る」という監視者の例も随所に含まれている。その出現の範囲は、『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』（*Rāmāyaṇa*）といった古代叙事詩だけでなく、7世紀の詩人バーナバッタ（*Bāṇabhaṭṭa*）の散文詩『カーダンバリー』（*Kādambarī*）に及んでいる（Hara 2009: 265f.）。

本論考で見てきたとおり、「内なる証人」の観念は、ウパニシャッドから『マヌ法典』につらなるヴェーダの伝統の中で醸成されたものである。しかし、その伝統の掉尾に位置する法典文献は、社会の上位にいる一部の教養人たちだけでなく、幅広い層のヒンドゥー教徒に対して生き方を教えるものであった。それゆえに、『マハーバーラタ』をはじめ多くの文芸作品が、登場人物たちの口を借りる形で、人々に法典の規定や、その土台にある思想を伝えてきた。冒頭に挙げたシャクンタラーの言葉も、まさしくそうした営為の一例である。そうした文芸作品を聞く、あるいは読むという経験を通して、ヒンドゥー教徒の間には、自らの「内なる証人」にもとらない生き方をするという固有の倫理観も芽生えていったと思われる。

略号・一次文献

- | | |
|--------|--|
| ĀpDhS | Āpastamba-Dharma-Sūtra, edition in Olivelle (2000). |
| AV-P | Atharvaveda-Saṁhitā Paippalāda Recension: Dipak Bhattacharya ed. (1997–2016). <i>The Paippalāda-Saṁhitā of the Atharvaveda</i> . 4 vols. Calcutta: The Asiatic Society. |
| AV-Ś | Atharvaveda-Saṁhitā Śaunaka Recension: Vishva Bandhu ed. (1960–1964). <i>Atharvaveda (Śaunaka) with Pada-pāṭha and Sāyaṇācārya's Commentary</i> . 5 vols. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute. |
| BĀU-K | Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad Kāṇva Recension, edition in Olivelle (1998). |
| BS | Brahma-Sūtra: <i>Brahmasutrabhasya</i> , <i>The Works of Sri Sankaracharya</i> , vol. 1. Srirangam: Sri Vani Vilas Press (1910). |
| ChU | Chāndogya-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998). |
| GauDhS | Gautama-Dharma-Sūtra, edition in Olivelle (2000). |
| JB | Jaiminiya- Brāhmaṇa: Raghu Vira & Lokesh Chandra (1954). <i>Jaiminiya-Brahmana of the Sama Veda: Complete Text Critically Edited for the First Time</i> . Nagpur: International Academy of Indian Culture |
| JUB | Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa, 藤井 2020 所載テキスト使用 |
| KB | Kauṣītaki-Brāhmaṇa: B. Lindner ed. (1887). <i>Das Kauṣītaki-</i> |

- Brāhmaṇa*. Jena: Hermann Costenoble.
- KauṣU Kauṣītaki-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998).
- KĀŚ Kauṭīliya Artha-Śāstra: R. P. Kangle ed. (1969–1972). *The Kauṭīliya Arthaśāstra*, 2nd ed. Delhi: Motilal Banarsidass.
- KaṭhU Kaṭha-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998).
- MaitU Maitrāyaṇīya-Upaniṣad, edition in Buitenen (1962).
- MBh Mahābhārata: Vishnu S. Sukthankar et al. eds. (1933–66). *The Mahābhārata: For the First Time Critically Edited*, 19 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- MānDhŚ Mānava-Dharma-Śāstra, edition in Olivelle (2004).
- MuṇḍU Muṇḍaka-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998).
- NārSm Nārada-Smṛti: R. W. Larivière (1989). *The Nāradasmṛti: Critically Edited with an Introduction, Annotated Translation, and Appendices (University of Pennsylvania Studies on South Asia 4–5)*. Philadelphia.
- PraśU Praśna-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998).
- RV Ṛgveda-Saṁhitā: Th. Aufrecht ed. (1861–1863). *Die Hymnen des Rigveda*. 2 Bde, Berlin: Ferd. Dummler.
- ŚB-K Śatapatha-Brāhmaṇa Kāṇva Recension: C. R. Swaminathan ed. (1994–2015). *Kāṇvaśatapathabrāhmaṇam*. New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts / Delhi: Motilal Banarsidass.
- ŚB-M Śatapatha-Brāhmaṇa Mādhyandina Recension: A. Weber ed. (1855). *The Śatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çâkhâ with Extracts from the Commentaries of Sâyaṇa, Harisvâmin and Dvivedaganga*. Berlin-London.
- SK Sāṃkhyakārikā, extracted from A. Wezler & Sh. Motegi eds. (1998). *Yuktidīpikā: the most significant commentary on the Sāṃkhyakārikā (Alt- und neu-indische Studien 44)*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- ŚvetU Śvetāśvatara-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998).
- TU Taittirīya-Upaniṣad, edition in Olivelle (1998).

- VasDhS Vasiṣṭha-Dharma-Sūtra, edition in Olivelle (2000).
- ViSm Viṣṇu-Smṛti: V. Krishnamacharya ed. (1964). *Viṣṇusmṛti: With the Commentary Keśavavaijayanti of Nandapaṇḍita* (The Adyar Library Series 93: 1–2). Madras: Adyar Library and Research Centre.
- YājDhŚ Yājñavalkya-Dharma-Śāstra: Narayan Ram Acharya ed. (1949). *Yājñavalkya-Smṛti of Yogīśvara Yājñavalkya: With the Commentary Mitākṣarā of Vijnāneśvara, Notes, Variant readings*. Bombay: Nirnayasagara Press, Bombay.
- YS Yogasūtra: *Pātañjalayogasūtraṇi*. Ānandāsrama Sanskrit Series 47 (1984).

参考文献

- 阪本（後藤）純子（2015）.『生命エネルギー循環の思想：「輪廻と業」理論の起源と形成』（RINDAS 伝統思想シリーズ 24）. 京都：龍谷大学現代インド研究センター.
- 藤井 正人（2020）.「祭式歌詠と思想—最初のウパニシャッドはどのように生まれたのか—」.『人文学報』（京都大学人文科学研究所紀要）115: 51–105.
- 村上 真完（1978）.『サーンクヤ哲学研究—インド哲学における自我観—』. 東京：春秋社.
- 村上 真完（1991）.『インド哲学概論』. 京都：平楽寺書店.
- 吉水 清孝（2010）.「『マヌ法典』註釈家 Bhāruci の paramātman 論」.『印度學佛教學研究』59–1: 302–297.
- （2015）.『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判：法源論の見地から』（RINDAS 伝統思想シリーズ 25）. 京都：龍谷大学現代インド研究センター.
- Bronkhorst, Johannes (1985). “The Origin of an Indian Dietary Rule: Evidence for a Lost Mānava Work on Dharma”. *Aligarh Journal of Oriental and Classical Studies* 2 (1–2: Ram Suresh Tripathi Commemoration Volume): 123–132.
- （2012）. “Manu and the Mahābhārata”. In: *Indologica: Papers of the*

- Institute of Oriental and Classical Studies 40 (T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume Book 2)*, 135–156.
- van Buitenen, J. A. B. (1962). *The Maitrayaniya Upanisad: A Critical Essay, with Text, Translation, and Commentary*. 's-Gravenhage: Mouton.
- Edgerton, Franklin (1965). *The Beginnings of Indian Philosophy: Selections from the Rig Veda, Atharva Veda, Upaniṣads, and Mahābhārata*. London: Allen & Unwin.
- Fujii, Masato (2026). “Vedic *aghalá-/akhala-*: The Abstract and the Handout Presented at the 7th International Vedic Workshop, August 19–24, 2019, Dubrovnik, Croatia”. In: Mieko Kajihara (ed.). *Gleanings of Indian Languages and Literature 2026* (梶原三恵子〔編〕『インド語インド文学拾遺 2026』), 51–56. Available in the Website “UTokyo Repository”.
- Hara, Minoru (2009). “Divine Witness”. *Journal of Indian Philosophy* 37: 253–272.
- Hoffmann, Karl (1967). *Der Injunktiv im Veda: Eine synchronische Funktionsuntersuchung*. Heidelberg: Carl Winter/Universität Verlag.
- Hopkins, E. Washburn (1901). *The Great Epic of India: Its Character and Origin*. Calcutta: Punthi Pustak.
- Jamison, Stephanie W. (2000). “A Sanskrit maxim and its ritual and legal applications”. In Almut Hintze and Eva Tichy (eds). *Anusantatyai: Festschrift für Johanna Narten zum 70. Geburtstag*, 111–125. Dettelbach: J. H. Röhl.
- Johnston, Edward Hamilton (1937). *Early Sāṃkhya: An Essay on its Historical Development according to the Texts*. London: Royal Asiatic Society.
- Kane, Pandurang Vaman (1968–1977). *History of Dharmaśāstra: Ancient and Mediaeval Religious and Civil Law in India*, 2nd ed. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Larson, Gerald James (1979). *Classical Sāṃkhya: An Interpretation of Its History and Meaning*, 2nd revised ed. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Macdonell, Arthur Anthony (1897). *Vedic Mythology*. Strassburg: K.J. Trübner.
- Narten, Johanna (1964). *Die sigmatischen Aoriste im Veda*. Wiesbaden: Otto

- Harrassowitz.
- Oberlies, Thomas (1998). “Die Śvetāśvatara-Upaniṣad Edition und Übersetzung von Adhyāya IV-VI”. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 42: 77–138.
- O’Flaherty, Wendy Doniger, ed. (1983). *Karma and Rebirth in Classical Indian Traditions*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Olivelle, Patrick (1998). *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- (2004). *Manu’s Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- (2000). *Dharmasūtra: The Law Codes of Āpastamba, Gautama, Baudhāyana, and Vasiṣṭha*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Rau, Wilhelm (1964). “Versuch einer deutschen Übersetzung der Śvetāśvatara Upaniṣad”. *Asiatische Studien* 17: 25–46.
- Rocher, Ludo (1956). *Vyavahāracintāmaṇi: A Digest on Hindu Legal Procedure, Critically Edited with Introduction, Annotated Translation and Appendices*. Gentse Orientalistische Bijdragen 1.
- (1983). “Karma and Rebirth in the Dharmaśāstra”. In Wendy Doniger O’Flaherty (ed.), *Karma and Rebirth in Classical Indian Traditions*, 61–89. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Witzel, Michael (2005). “The Veda and the Epics: Some Comparative Notes on Persons, Lineages, Geography and Grammar”. In: Petteri Koskikallio, Mislav Ježić (eds.), *Epics, Khilas, and Purāṇas: Continuities and Ruptures: Proceedings of the Third Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Purāṇas, September 2002*, 21–80. Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts.

Aspects of Views on the World and Human Nature in Ancient and Medieval India

Edited by Hideki TESHIMA

April 10, 2026

Issued by

Institute for Research on Humanities, Kyoto University (Joint Research Project “Evolution of the Indian Ontology in the Cyclic Image Focusing around the Development Process from Ritualistic Thoughts to Philosophical Views”)

Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501

古代・中世インドにおける世界観と人間観の諸相

手嶋英貴・編

2026年4月10日発行

発行者 京都大学人文科学研究所（共同研究「インドにおける『循環的存在論』の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に」）

〒606-8501 京都市左京区吉田本町